

授業の流れを振り返る

日高：はい、それでは始めましょう。よろしくお願いします。

島村：はい。では……。

日高：「はじめに」の原稿はここにあるんですけどー。

島村：はい。

日高：授業全体の流れを、一応振り返りますと、一回目の授業が4月13日でガイダンス、そのときに、この「はじめに」の2ページのところにあるように、それぞれに希望の調査テーマを書いてもらったんですね。

島村：はい。

日高：ここからどう展開して、今、この目の前にあるレポートに行き着いたかっていうところですが、4月から7月にかけて月1回の学習会、それから7月22日に調査計画発表会を合宿形式で行い、そして9月のフィールドワーク本番。その後、それぞれで考察をした結果を、12月22日の研究成果発表会で検討し、それを踏まえて今回のレポートの形になっているわけですけど。……送別会¹を1月30日にやりましたよね。（笑い）翌日がレポートの締め切りだというのに。

島村：（笑い）

日高：あれは何ですか。

島村：いや、あれは、学生が30日がいいって言ったんですよ。

日高：ふん、ふん。

島村：すみません。

日高：いえいえ（笑い）

島村：おかげで提出が遅れた人がいたようですが、はい。



島村恭則（民俗学）



日高水穂（方言学）

日高：（笑い）いや、ちゃんとみんな、それにもかかわらず、頑張ってレポートをまとめてくれているし、何よりも「島村先生を送別しなければ」という、すごく並々ならぬみんなの熱意がありましたよね。送別会どうでした？

島村：あー、送別会はですね、はい、あの一。

日高：成長は見られました？

島村：見られましたよ。ええ。

日高：今年何回か一緒に飲んでますよね？

島村：ええ、飲んでますねー。

日高：7月の合宿もそうだし。

島村：そう。

日高：で、フィールドワークの本番もそうだし。

島村：はい。

日高：で、12月の研究成果発表会も。

島村：そう、そう、そう、そう。合宿で2回と、現地で1回みたいな。で、調査地で最終日に打ち上げをやったときは、ここでこんなのがあったとか、自分が体験したことを何となくみんなある程度披露し合っていたんですが、でも、こっちが期待してたのは、やっぱりその、何だろうなー、あの一、なんかもうちょっとなんか生産的なね、話するかなと思っていたんですが、でもしてなかったわけなんですよ。で、それは最後の合宿の場合も、さすがに自分でレポート書いて文字にしたら、もうちょっと客体化してるって言うかね、それは頭の中も整理できてるでしょうから、それを巡ってお話し合いしてくれるかなっていうのが私たちとしては、12月の合宿の22日に期待していたんですが、そうはならなかったと。まあ、昼間発表して疲れてしまったのかもしれませんが、その辺にお子様ぶりを見てしまいましたが、2年生の。で、さあ、そこで送別会は沖縄の授業とは直接関係ないとはいえ、まあ同じ

¹ 島村は2008年4月1日より関西学院大学に転出することになっており、島村の担当する朝鮮語科目の履修者（沖縄フィールドワーク参加者の大多数を含む）が2008年1月30日に送別会を行った。

メンバーだから、送別会のときにはどうかと思ったら、まあ、ま、ちょっとはね。

日高:(笑い)送別会のほうは、なんだかずいぶん満足のいくような盛り上がりだったようで。

島村:はい、はい、はい、はい。

日高:その前にプレッシャーかけてたでしょう?

島村:ええ、かけました、かけました。

日高:「君たちと飲んでも面白くない」って。

島村:んおおう。言った、言った、言った、言った。で、言ったらちょっとは考えたんじゃないでしょうか。それはですねえ、あのですねえ、だから、2年生ってやっぱり、過渡期なんですよ。それはこの授業は、ま、去年は3年生も混じってたけど、ま、とりあえず2年生で取れるようになって取りますよね。それで、日ア²が上がってくる前も、日アに来たらこういう授業があるから、沖縄行こうねとか言ってるわけですよ。それで入ってきたけど、で、いろんな準備をして、かなり準備を彼らがするから、で、実際できあがったものもちゃんとしたものができてきますが、これは一生懸命やってそうなるんだけど、もうちょっとトータルで見たときには、やっぱり大学2年生なんですよ。で、2年生に、こっちもそれを忘れるときがあって、もう、ほんと下手すればゼミの学生相手してるぐらいのレベルの高さになっちゃうから、そういうことまで期待してしまうのかもしれないんだけど、まあ、成長の過程にあるということで、結果を早急に求めるべきではないというふうには思います。レポートの内容はもちろん高度なものを求めますけど。何て言うか、打ち上げとかでどこまで話せるかなというところは、あんまり……。とはいえ、でもやっぱりちょっと不思議さは残りますよ。ここまでやったらもっと話すんじゃないかっていう。それはね、それぞれのレポートの草稿の段階で、何かこう、薄さを感じた。薄さを。もっとこれ知ってるんだから、もっとこう盛りこめばいいのに。で、その、過剰さを感じられないわけですよ。枠の中ではやるけど、そこから溢れるようなものをもっと見ているはずなのに、何か、枠に入れちゃう。

日高:うん、うん。

島村:で、同じそういう構図がですね、たとえばこの、合宿をしたときに、昼間の10時から5時までの間の中でやればもうおしまいと、で、そこから先の、むしろ期待していたのは、何かコンパやったときに、昼間の話の議論ガーってなるかなって、その部分の、この枠の外の部分で、喋りたいとか、それが感じられないというのは文章にも表れていて、なんか、フィールドではさすがにそれはないと思うけど、もしかしたらそ

こでもね、ある種抑制をしてたとしたらちょっと悲しいというかなですね。

日高:パワーポイントの弊害とかも、合宿の後で、ちょっと言っていましたよね。

島村:そう、そう。パワーポイントはやっぱり、あれはほんとに四角の中に入れるって発想なんですよ。

日高:うん、うん、うん。

島村:ね。この四角い中に入れていく。だから、ここからこぼれちゃうものは削ぎ落とすっていう練習をずーっとやってきてるから。あれがすべてのやり方だと思われちゃうと、そういうふうになるんですよ。

日高:今回の場合は、「島村先生がいなくなる」っていうのところまでが、教育上の(笑い)プログラムだったのかなと、私なんかは感じてますけど。ギリギリのレポート提出の前日に、まあ、そこしか空いていないということだったんでしょけど、えーっと……。

島村:しつこいですね(笑い)

日高:(笑い)つまり、私たちが受けてきた専門の領域の言語学なり、民俗学なりの分野で、どういう場で何を学んできたかっていうと、やっぱり飲み場とか、授業の教室の場じゃないところで得てきたものってすごく大きいと思うんですよ。そこでお互いに共有できる話をガンガンできるようになるまでに、やっぱり先輩の言動を見ながら、この場でこういう議論をするんだとか、こういうこと言ったら、なんか、袋だたきにあうんだとか、そういうのを学びながら体得してきた部分っていうのがあって。この授業の場合には、そこも含めてプログラムの中に入っていて、だから教室の場面だけじゃないところも含めて、一緒にやってきたっていうふうに思うんですよ。

島村:そう、そう、そう、そう。

日高:その最後の集大成だったのが30日の送別会で、翌日のレポート提出。そこで出てきたものは、提出後にもかなり手直しをしてこの形になったのではありませんが、エッセンスが残ったなっていう感じがします。12月の合宿の時点では、まだあれもこれもっていうのを詰め込んでいたり、あるいは、これはもっと書けるはずっていうのが抜けていたりして、すごく粗かったのが整理されて、ここは削る、この部分は加えるっていう、「取舍選択」ができてきたなと思いますね。

島村:そうですね。

遠藤綾「模合から見る沖縄社会」

日高:そこで、最初にたまたま一番上にあるからですけど、遠藤綾さんの「模合から見る沖縄社会」。遠藤さんも草稿段階ではいろんなこと書いてましたよね。「話がつながっていない」というようなことを指摘しましたけど。草稿段階では、「はじめに」「模合とは」のあ

² 日本・アジア文化選修の略称。

とに「模合の歴史」っていうのがあったんですね。

島村：ありましたねえ。

日高：それがごっそり、なくなってますよね。これはかなり彼女が考えたところだと思いますよ。草稿では、模合の歴史っていうのがすごく中途半端にしか書かれていなくて、書くだったらもっと調べて書かなきゃいけないっていう指摘を受けたのに対してどうしようかっていうので、いろいろ文献集めたみたいなんです。で、その結果自分の手に負えるものじゃないっていうくらい膨大な資料に行き着いてしまったっていうこともどうもあるみたいなんですけど、この部分がなくても、今回自分が巡り会ったものを厳選して書けばこうなる、っていうところにたどり着いたわけで。

島村：そうですねえ。あのー、たぶんですね、他、同じような人が誰かな……。後でまた出てくるけど、似たような人は結構いたと思いますね。つまり、どうしても「お勉強」になっちゃって、必ず「何とかの歴史」を書かなきゃいけないみたいなのがあって、それはフィールドワークではないわけで、もちろん知ってなければならぬけど、それを別に報告で必要以上に書く必要はないので、というところでは遠藤さんは今回の手直しの過程でそういう研究のやり方を学んだのでしょうかねえ。

日高：これ、内容的にはどうですか。

島村：はい。面白いのは、一つはですね、この中に模合帳の写真が入ってますよね。模合帳の規約のページとか、実際の記録欄とか。で、こういうのは現場に行かないと手に入らない。模合をやってる場に行かなきゃもらえないものですよ。これは資料としても面白い。それからもう一つは、みんなインターネットで資料を集めてくる。みんなそうですけど、それはだからインターネットは二次資料や三次資料、インターネットに出ているものって多くはいろんなものの孫引きですよ。それを引用するというのは、私たちが期待しているネットの使い方じゃ全然なくて、まあ、それは調査行く前に当たりをつける上ではいいんですけど、それ引用してどうすんのかなありますけど。でも、それとは全然別な意味で、ほんとのオリジナルなものだから。遠藤さんが引用している E-moai は。

日高：(笑い)

島村：(笑い) これはネットにしかないんですよ。この E-moai は。

日高：(笑い)

島村：E-moai だから。

日高：うん、うん、うん。

島村：で、こういうのはもちろん必要だし、この、今までの模合研究の中にはですねえ、模合の文献っていっぱい、この彼女のリスト、文献リストの中にちょっと

出てるけど、たとえば、2001年の生地さんが模合の履歴っていうのをやっていて、これは沖縄の模合研究では、まあ、比較的6年、7年前ですけども、ま、ここが今わかっているところの、何て言うんですか？ 研究史的に言うんですけど、一番直近のものなわけですよ。で、その時代にはまだ E-moai はないわけですから、研究の世界でははじめて報告したということになる。新聞なんかでそういうトピックを紹介してるかもしれないけど。これは報告としては初めてかもしれないというところが、面白かったと。

日高：はい。

島村：面白さで言うともう一個がこの、模合崩れ？ これもですねえ、模合の研究をするとどうしてもなんかこう、予定調和的な、調和の取れた世界、相互扶助とか、共同性っていうような世界を描こうとする。もちろん模合にはそういう側面もありますけど、調和のとれた、完成した形のように見えるけど中は実は動いていて、出入りがあったり葛藤もある。のは当たり前じゃないですか、みたいなところにきちっと注目できたのはよかったと。で、写真1に新聞記事が載っていますが、これもですねえ、着いたその日の新聞でたまたま。で、私、学生に着いたその日から新聞をもらえ、新聞をもらえて、ホテルに置いてる新聞もらえて言ってるのに、なかなかもらってないから、とっといて一人ずつ渡したりしてたけど、新聞の中に、その調査中に読むあの『琉球新報』とか『沖縄タイムス』の中に、彼らのネタ、ここに、このレポートに出てるテーマのものが入ってるじゃないですか。この「方言ニュース」、方言のものも出てたし、沖縄各地で行なわれる青年祭なんかもその時期だったし、ま、キジムナーはないかもしれないけど、空手の広告あったでしょ。これなんてありましたよ。マダン橋の逆立ち幽霊？ あれの話が、帰る日の飛行機乗る直前に新聞買ったじゃないですか。

日高：はい、はい、はい、はい。

島村：これのね、演劇の報告っていうか、記事が出てたでしょ。

日高：(笑い)で、ちょうど時期的にはエイサーがあったから、これもですよ、嵯峨さんの。

島村：そう、そう、そう。

日高：嵯峨さんに行く前に、一つ補足として聞いておきたいことがあるんですけど。

島村：何？

日高：遠藤さんのレポートでは、模合っていうのはすごく特殊な形態で、沖縄だけで行われているような前提のもとに描かれている感じが若干しますけど。ま、導入のところ、本土には頼母子講とか無尽講とか言われるものがあることは説明されていますが、こちらの

方は今、本土ではどういう状況なんですか。

島村：本土ではもう、けっこう山梨県とか、県によって盛んだったり盛んじゃなかったりみたいなんですけど、山梨なんか今でもすごい、論文でだいたい山梨の事例がよく取りあげられるんですね。

日高：ほうほう。

島村：それとか、秋田県でもまだところどころやってる。遠藤綾さん自身も近所のオートバイ屋さんが、無尽で資金を集めてオートバイ屋をはじめたとかって。

日高：ふーん。

島村：遠藤さん自身も、これはなんか、沖縄の話をも別のものとしてももしかしたら最初は思ってたかもしれないけど、実はある種地続きみたいなのところがあって。で、それはあの、もうちょっと韓国にもケーというものがありましてですね、ケー、契約の契って書くんですけど。

日高：ふんふんふん。

島村：そういうものとかの、何だろう、何ですか？ 同時に本土にもあるし、みたいなそれは歴史的にどう関連があるのか、ちょっと今すぐはわからないけど。というもののなかで、沖縄の模合があるわけですよ。

日高：で、地域のネットワークのあり方っていうのが、本土側と沖縄では違うというふうに、研究者の立場では、把握されてます？

島村：はい。そうですね。沖縄の場合は比較的若い人もやってるんですよ。

日高：ふんふんふんふん。

島村：大学生なんかでもやってる場合がありますし、20代の社会人とかでもかなりやってるみたいですね。



学習会の様子 (2007.5.11)

嵯峨佳菜「青年会から見る沖縄社会」

日高：で、この、嵯峨さんの「青年会から見る沖縄社会」ですけど。

島村：そう、そう、そう。

日高：これすごく何か連続してるんですよ。遠藤さんが着目しているものと……。

島村：はい。

日高：つまりこう、若い人の横のつながりで、地域を結びつけようっていうような、そういう動きが沖縄の中にあることが、嵯峨さんにとっては新鮮だったんですね。昔は本土っていうか、まあ、秋田でもあったらしいものが、今はあまり機能しないっていうところがどうも出発点になっていて。昭和36年の秋田国体のときに、青年会・婦人会っていうのがすごく機能した、と、ある授業でそういうのを調べたわけですが、現在はそういうものが存在することすら自分は知らなかった。でも沖縄では青年会というのがすごく機能していると。

島村：はい。うん。

日高：まずはこの、彼女のレポート自体はどうですか？

島村：そうですね、機能をしているっていうのがすごくよくわかるのは、ほんとに現場に行かなければわかんないという証拠写真が、写真23、24みたいな、ゆんたくの様子、つまり青年会で集まって、おしゃべりしているわけですね。その場に行ったわけですね。つまりこれは聞き取り調査をするつもりで行ったんだけど、現場にそのまま参加しちゃったっていうね、ことで、それがよく伝わってきてるっていう、大学生ならではの調査報告だと思いますよ。研究者ではなかなかできないし。そしてそのときに、何ですかね、あの一、そうそう、この部屋の様子をね、よくじいーと見ていると、いろんなその青年会が使ういろんな道具とか、いろんなものが貼ってあったりっていうところに臨場感がありますね、この写真22なんてね、黒板みたいなものがあったり、いろんなものがぶら下がってたりとかですね。

日高：ふん、ふん。

島村：で、このような雰囲気というか、ここが実際さっきの遠藤さんの模合なんかのま一、母体みたいなですね、ものになっていて。で、嵯峨さんの場合は、これはほんとによく調べられていて、で、時期がですね、さっきあの一、調査地に行ったときに新聞記事には調査テーマのほとんどのことが出てるよ、新聞見れば資料になるんだよって言いましたけど、ちょうどこの、私たちが調査に行ったときは、ん？ 9月でしたっけ？

日高：はい、9月でした。

島村：9月、10月っていうのはちょうどエイサーの時期で、それどころかエイサーをやってないところも青年祭みたいな感じで、「青年の月」なんですよ。これを年中行事論でやったら面白いと思うんですけど、8月、旧暦8月っていうのはお盆の、まあ、「祖先の月」かもしれないですね。で、もちろんエイサーもお盆のあれなんで、当然旧暦8月だから、つまり、伝統的、伝

統的っていうか何か、一つは「祖先の月」なんだけど、それは「エイサーの月」でもあるわけですよ。もちろん、お盆だから。で、エイサーの担い手っていうのは青年会です。で、それと、その場合、必ずしもエイサーやってない青年会もあるわけで、今は伝統の復活、復活っていうか創造みたいな形で、エイサーやり出してますけど。やってなかったところ、元々やってないところもある。そういうところもエイサーはやらなくても何らかのイベントを青年祭という名前でやっている。その青年祭の新聞記事なんかにもバンバン出ているわけなんですよ。9月は青年の記事がすごく多い。という時期もすごくよかったですね。

日高：はい。

島村：私たちがこれを1月にやってもたぶんここまで嵯峨さんが上手く書けたかどうかはわからない。9月だから書きやすかった。調査は生ものですよ。はい。



学習会の様子 (2007.5.11)

佐々木佳子「ユタと寺」

日高：では、その祖先祭祀っていうことで、沖縄の信仰に関してですけど、まず、佐々木佳子さんの「ユタと寺」。

島村：ユタですねえ。はい。このユタの論文のウリはですね、ま、ユタは誰でも、誰でもというか、もう、沖縄といえどユタみたいな。こないだもテレビで、かつては考えられなかったけど、何かよくわかんないけど、芸能人が沖縄に行ってユタに会いに行こうみたいなそういう番組があった。それぐらいに、誰でもやるんですよ。卒論なんかでもユタを扱う卒論なんてもうそこらの大学で出ているわけですねえ。

日高：ふん、ふん。

島村：佐々木さんにも貸したんですけど、どこだったっけ？ 茨城大学の学生かなんかかなあ、何年前に、こう、メールが来て、ユタやりたいんですけどと。で、アドバイスしてあげたら最後に書いたもの送ってきたんですけど、みたいな、多いんですよ。大学生が沖縄やると、やっぱりユタみたいなねえ。

日高：うーん。

島村：で、彼女の場合もやっぱりそういうところがあって、こう、何ていうか不思議なものですからね、面白いっていう、怖いもの見たさもあるかもしれないけど。で、飛び込んでいったわけですよ。で、これが運なんですけども、泉美代子さんっていう方に会えたっていう。で、こう、調査をしてそこからいろいろとユタにまつわることを調べてありまして、これはまあ、一つの調査としては基本的な内容なわけですが、面白いのは、この論文で面白いのは、ユタは実際にはシャーマニズムだけ、その、特に那覇の場合なんですけど首里十二箇所巡りっていう巡礼みたいなのは、お寺を廻る。ここではユタのシャーマニズムと仏教のお寺とが重なってくるんですね。

日高：うん、うん。

島村：で、その際に彼女は、そこで問題を発見したんでしょうね。あの一、つまりね、ユタから入ってるんだけど、彼女のある種の自分の中での発見っていうのはユタから入ってユタがわかったんじゃないんですよ。あの一、仏教の違いに対するある種ショックを受けた。

日高：うーん。

島村：なんだろう、これは仏教なのかという。そこで、自省するわけですよ。で、自分の、彼女の、この中にも書いてあったと思うけど、お祖父さんの家がお寺、私の祖父の寺ってこう、写真8があるけど、そこに持っていった。比較をしているわけですよ。自分なりの、ま、文献を読みながらですが、檀家制度をとともう本土の仏教と、シャーマニズムと重なり合っている沖縄の仏教とを比較している。これは結構調査の結果の記述のあり方としては面白くて。入り口はユタだったんだけど、出口は私の祖父の寺にいったかみたいな。これはあの一、ちょっと面白い。つまりあの一、記述の詳しさとかは別として、ここでは本人にとって重要な問題を見つけられたんじゃないかと。

日高：よくまとまっていて面白いと思います。ただ、やっぱりこう、まだ記述に「素直だなー」と思う部分があって、えーとー、沖縄の信仰のあり方っていうのが、たとえば「3. 沖縄の先祖崇拜」の所で「古い日本のよさを最も色濃く残している沖縄が」なんていうふうに。こういうのはどうですか？

島村：これはおかしき言説で……。いやー、これはもう、あれでしょう。これを南島イデオロギーと言いまして、これはある種日本版オリエンタリズムなんですけど……。いまの研究者はそんなふうには言わないですけども、こういうのにちょっと引きずられちゃったのは残念。ま、ここは、この、推敲の段階ですね、指摘して、「ここどう思う？」みたいなのをやっていくのが一つの教育だったと思いますし、やるべきだとは思うんだ

けど。少なくとも本人にはそれを教えたいけど、今日現在のところそのままになってしまっている。南島イデオロギー批判のような議論にふれないまま今日に至ってしまって、それで彼女はもう、書いてきちゃったんだーみたいに思ってますけど。

日高：うん、うん。

島村：まあ、別な機会にそのことは佐々木さんも含めてみんなに考えてもらいたいと思います。確かにここはほんと素直に書きちゃってますね。

日高：今後もう一歩次の段階に入るとすると、自分が対象にしているものをもう少し客観視するような、まあ、批判的にとは言いませんけど。もう少し多様な見方で見るという視点が持てるようになるのが、次の段階かなあって思いますね。

島村：そうですね。そう思いますね。さらにもっと先行くと、何でユタに興味持たなきゃいけないのかみたいな。

日高：ふーん。

島村：沖縄といえばユタということ自体をかなりの、何というか.....。

日高：彼女の場合は、学習会では「沖縄の生活文化 カミ」というテーマでグループ発表をしていて、「沖縄の神についての発表で、ユタについて調べていくうちに本物のユタに会ってみたいと思うようになった」ってありますよねえ。

島村：あー。神。

日高：そもそも学習会の中では「沖縄の生活文化」っていうのを、「社会と歴史」「衣食住」そして「神」っていう3本立てでやりましたよね。

島村：はー、そうでした、そうでした。

日高：あと、「沖縄のこぼ」っていうので、4本立てでそれぞれに分担してもらって、事前に調べたことを発表してもらったわけなんですけど、先生の構想の中で「社会と歴史」「衣食住」と並ぶものとして「神」っていうものを立てる必要があるっていうのはどういう、こう.....。

島村：はい。はい。これはあのう、さっき言ったみたいなオリエンタリズムみたいな意味ではないですけど、ないんだけど、つまり、典型的なものとか本質的ななんか、宗教的なものが沖縄にはあるっていうふうに言うわけではない.....、言うつもりはないんですけども、やっぱり実態として民俗宗教の世界が非常にシンクレティックなっていうか、混ざったりして強力に存在している。

日高：ふん、ふん。

島村：つまり、それがあつことはある。強烈に、ある種強烈にある。で、それを見ないとやっぱり、見たことにならないので、そこをやった.....。だからそれはいい

いんですよ。だから、いいのですけど、それを純化した形でユタとか、御嶽みたいに言っちゃうとちょっとあれかな。

日高：ただある意味でこの佐々木さんの場合は、流れに沿って進んできた感じはありますよ。4月の時点では「沖縄の来訪神・憑依神・ノロ制度」を調査テーマにあげていますが、それはその前に日朝比較文化論³の発表材料で来訪神についての本を読んで興味を持ったっていうふう書いてますよね。本人がお寺の孫だっていうところがおそらく出発点になっていて、さらに受けた授業の中でこう、一本の道が。

島村：そうでした、そう！ そうなんですよ、ナマハゲを見に男鹿に行ったじゃないですか、4月の日アのオリエンテーションで。あの頃にナマハゲ見に行くから来訪神とか勉強してたんですよ。

日高：ふんふん。

島村：だからそういう意味では、もう実は日アで男鹿に行ったのからつながって沖縄に行って、最後はお祖父さんのお寺行っちゃったみたいな。

日高：ふんふんふんふん。

島村：という意味では、充実した2年生でしたね。

日高：(笑い)そう。彼女にとってはこれは無意識のうちにも必然性のある流れ、単に観念的に「沖縄といえばユタだろう」とかじゃないんじゃないかな、と。

島村：あー、じゃあすごい安心ですね。そう、そう、そう、そう、そう。男鹿のナマハゲから始まったんでした。で、沖縄行って、で、仏教、檀家制度に戻ってきたみたいな。

日高：うんうん。

島村：そう、私たちはそうですね。研究論文を求めているわけではない。もちろん高度なものを求めているんだけど、ある種のそこに、何だろうな、一貫性じゃないな、何て言うかこう、なんか物語ができればそれで成功という感じですね。



調査計画発表会の様子 (2007.7.22)

³ 島村の担当する科目。

加藤悠「浜比嘉島における神話の世界」

日高：次は、宗教、信仰ってということとの関係で。

島村：神話？

日高：神話。はい。加藤悠さんの「浜比嘉島における神話の世界」これはかなりテクニカルなところを要する（笑い）まとめ方になってますよね。

島村：そうですねえ。

日高：私、彼女だけ一人称詞を変えさせちゃったんですよね。

島村：えっ。

日高：最初「私」っていうの、他の人はみんな「私はこうしました」みたいな書き方をしている、彼女もそうだったんですけど、文体に合わないから「筆者」って書き直させたんですよ。

島村：はい、はい。

日高：これは単に見聞きしてみたもの、自分の目で見たっていうレポートとはちょっと違って文献をかなり扱う。それと現地調査との兼ね合わせで考察している部分が入ってますよね。で、この部分については、かなり島村先生のアイデアが反映していると思いますけど。

島村：はい、はい。この裏事情を言いますと、この調査実習にはもちろんフィールドワーカーを、まあ、卒論とかでも志している人だけではないし、もしかして自分でもどっかわからない人もいます。フィールドワーク、面白そうだな。でもやってくうちに向き不向きがありますから。で、自分はそれよりちょっと文献の方がいいみたいな、当然入っているわけですよ。当たり前ですねえ。で、そういうことが2年生の段階でわかって、わかるのもある意味ではいいかもしれないし、ある意味では、そこで、それで棒をはめちゃうのも、私はフィールドワーク向きじゃないってやっちゃうのも危険性はありますよ、2年生でそれをやるっていうのは。

日高：ふん、ふん。

島村：あるのですし、けれども、そこはふまえた上で。加藤さんの場合は、最初ですねえ、最初の、4月何しようとしてたんだ？ あー、でも書いてるんですね、やっぱりね。沖縄の昔話、伝承か。

日高：彼女の場合は4月の時点でそうやって伝承っていうのを書いている。で、始祖神話なんて書いてるんですけど、これが7月の時点では「沖縄独特の贈答品」「沖縄の色彩感覚」「沖縄における女性の穢れ観」っていうので、ちょっとずれたんですね。なんか具体的にんだけど観念的というか（笑い）。

島村：わかります。たぶんですねえ、元々彼女神話が好きなんだと思いますよ。で、それはね、えーと、何、何、あの授業……あの……。

日高：「総合ゼミ」⁴。

島村：ええ。「総合ゼミ」でも与次郎稲荷という秋田の民間信仰+説話みたいなやつってうまくいったんですけども。ていうか、その前にもなんか、なんかそうですね、選修を選ぶときにも、なんかヨーロッパの神話に興味ありますみたいな感じのことを言っていたような気もして、どちらにしてもいわゆる漠然としたものかもしれないけど、神話とかに興味があった。ただ、その時の神話というのは、彼女の頭の中にある神話っていうのは、神話のですねえ、ほんとの神話の在り方っていうのは別に、その、本に出ている神話なわけですよ。で、これはほんとに神話を研究した人以外はみんな神話って古い書物に出てるものだと思っているかもしれない。でも神話っていうのは本来は語られてたものじゃないですか。口承で、口頭で。祭祀とセットで。で、それがあつた時文字に記録されて、そっちの世界で伝承、まあ、文字の記録だから「書承」っていいんですが、まあ、そうやって伝えられたわけで、研究するときにはその文字のものを扱いたがる。だからなんか神話をやるっていうと、文字になってる神話。で、加藤さんもそういう意味で今まで神話をイメージしてたと思う。で、それをやりたかったんだと思うんですよ。だから第一回目ではある意味そういう意味での神話。第二回目っていうか、その後この今ね、おっしゃったようにあのう、色彩はちょっと抽象的だけど、色彩とかなんだっけ？ 贈答とかですね。にいったのはなんでかなっていうと、おそらく彼女なりにこの授業で求められているのはフィールドワークなんだと察知したんでしょうね。その時に、さあ、フィールドで調べようって思っても、神話を調べるっていうのはイメージできなかったんだと思うんですよ。神話はこういう本に出ているものだと思っているから。そこで、じゃ、神話じゃないんだらうなと思って、調べられるものは何かっていうときに、一生懸命考えたんじゃないですか。で、贈答だったらお中元とかね。沖縄でもなんかやるから。で、沖縄らしさ。それなら調べられるかなぐらいに思ったんでしょうねえ。で、その後、えーどうしたんでしたっけ？

日高：合宿の時にはもう、この神話の話に……。

島村：戻ったんですよ。そこは何で戻ったんだ？

日高：えー、与次郎稲荷のせいですかねえ。

島村：あのへんでやっぱり、まあ、いけるかなってちょっと、フィールドでもあるのかなって思ったのかもしれないし、贈答で、逆に言うと、ああ、何か思い出したな。贈答で予備的なことをちょっと何か調べたよう

⁴ 教養基礎教育科目で2年次前期に履修。分野の異なる教員2～3名の担当する5つの講座に分かれ、グループでテーマを決めて調査・発表を行う。

な.....らしいけど、あんまり面白くなかったとか、うまくいかなそうで、やっぱり神話だと思ったんじゃないですか。でまあ、本来自分が好きな世界に戻った。それはいいと。さあ、そこで、じゃ、まあいいじゃないですか、文献貸して.....準備しましたよねえ。じゃ、具体的にはこの島とこの島、この表にあるところに行つてごらんみたいなことを事前の合宿では言つて。で、それで彼女はその中の一つの島を選んで、現地に行つたと。で、島なので、毎日ミーティングには出られなかった。向こうに行つたきりになる。ちょっとそこはかわいそうだったと思いますけども。

日高：2日目のミーティングが最初だったんですよね、彼女の場合は。最終日を1日残して、戻ってきて報告をしたんだけど、なかなかこう、期待していたような話者に会えない、というので、どこを切り口にしようかなと。

島村：あー、そうでした、そうでした。

日高：観光地レベルの資料は集まるんだけど、それ以上の踏み込んだものに出会えない感じでしたよね。

島村：そうでした。

日高：それでかなりミーティングの時には彼女には時間かかりましたでしょう。

島村：かかりましたね。それで結局、まー。

日高：そこで先行研究の文献、持ってきてるだろうって、ミーティングのあとで持ってきてもらって。

島村：そこがやっぱり文献の必要、先行研究ってやっぱり大事で。それを読んだ結果、で、私もちょっとそこまであんまり気がついてなかったんだけど、一緒に二人で読んで、ああっと気づいたことは、この山下欣一さんの文献に出てくる、この表2ですねえ。このアマミキヨ・シネリキヨ関係の伝承が浜比嘉島にはない。なんで浜比嘉島にないのにこんなにみんながアマミキヨ・シネリキヨって、この島に行くのか。おかしいなと。文献に出てないのに、でもみんなが行く。これは何だと。考えられるのは、たまたま文献に載らなかったけどずっと昔からそこに伝わっている。でもそうかな？ みたいなのがあって。さあ、そこで浜比嘉島を研究した人はいないのかっていうと小島瓊禮さんという、ここに出ている。で、この藪地島だけかな？ と浜比嘉島っていうのがある。で、これを彼女は持ってきてたから、一緒にじーっと見てたら、小島瓊禮さんは、非常に持って回った言い方なんだけど、正史や古謡にはその地名を発見できないが、浜比嘉島にも伝承されている、という含みのある言い方をしていると。で、これは要するに「つくられてんじゃないの？」みたいな含みですよな。

日高：ふんふんふんふん。

島村：含みなんですよ。それで、このことに気づいたわ

けですよ。で、じゃあ、もう一回行つてみて何かそれらしいことはわからないだろうかと。とはいえ、行つてもそこまでは出てこないですよなえ。現地行つたつてそれがつくられたものだってことは証明しようがないわけで。だからまあ、結局結論はわからないですよ。結論はわからないんだけど.....。

日高：で、そこから『勝連村史』などの資料を集めるっていうのが.....こっちにある民話とかですね、これらも現地で見とかなきゃいけないっていうので、一応そこで方針を立てたんだつたと思います。

島村：ああ、そうそうそう。そうです、そうです。で、できるだけその.....もしかしたら近代につくられちゃつたんじゃないですかみたいなことがわかるような資料がないのかな、郷土史とかに。で、まあ、行って。一応資料は集めてきたわけですねえ。はい。それでですねえ、で結局何て言うかな？ これはですねえ.....。でもまあ、ある意味では後で出てくる、これ、つながるのはあれですよ、あの、キジムナー。キジムナーの話、何て言うかな、ある種の.....分析じゃないけど、推理みたいなのが出てくる点では面白さがあると。

日高：そうそう、そうです。

島村：面白さがある、それで入る。で、元に戻すと、苦労したんですけど、とにかくそのフィールドにおいて神話というものがどのように生息しているのか。つまり、神話というものは現地で語られるものであり、またつくられるものであるかもしれないということ。で、もっと言えば、文献に出ているのだからある時につくられたのが、こう、記録されているわけですよな。というようなことまで彼女がちょっとわかつて、そこで最初の話に戻しますと、彼女の神話観が多少とも変わったかもしれない。

日高：うん、うん。

島村：高校生のときに、なんかー、あの一、なんかよくわからないけど、ヨーロッパの神話とかがあつてそういうの勉強したいなと思った。で、ここに来てもずっとそういう感じできて。で、文献の神話でって思っていた。で何だか知らないけど、現地行って、何て言うかー、まあ、ちょっと、非常になんだ、ハードな目にあつてですね。でも、まあ、なんとかギリギリ文献の中でこうなんじゃないのみたいなやつて。今さんざん説明したような。これやることによって彼女は身をもってですねえ、神話のあり方を体得したわけなんですよなえ。で、一生懸命やつてここまで書けた。それはよかつたねと。ただし、彼女はこのことによってフィールドワークは自分に向いてないぞと思つたかもしれない。

日高：(笑い)ほう。

島村：つまり、文献調査の世界の方が向いていると思つ

たかもしれませんね。それは本人に聞かなきゃわかんないけど。その一、この一件だけで自分がどっちに向いているかなんて決められないし、決めちゃうのもおかしいし、ここでまた私たちが語っていることが誘導してしまっはいけないけれども。

日高:(笑い)でも、やらないで、一つの方法だけを信じるよりも、やってみていくつかの方法を選択できるようになることは重要なことなので……。

島村:重要ですねえ。

日高:そういう意味での経験を、こなせたわけじゃないですか。

島村:はい。そう。そう。そう。だから次の段階にいったときには自分で判断できるかもしれない。



調査計画発表会の様子 (2007.7.22)

保坂真理「キジムナー伝承に見る伝承の場」

日高:やっぱり現地調査は当たり外れってありますよね。フィールドで、たった3日間の調査で結果が出るようなテーマを選べたかどうかというのは当たり外れがあるから、そういう点ではどうですか? 保坂真理さんの「キジムナー伝承に見る伝承の場」は、

島村:キジムナーも似てるんですよ。

日高:うん。

島村:これが。だから、結局フィールドワークで説話を扱うときにこういうことになるっていう、ある種一般的なケースかもしれない。

日高:そうですね。

島村:彼女の場合は……やっぱりあの一。何? 最初何やりたいって言ってたんでしたっけ?

日高:一番最初は沖縄の人々の生活・文化、特に食文化と酒などですね。そして7月の段階だと、あ、この時点でキジムナーの伝承になってますね。

島村:あー、見つけたっていう感じですね。勉強したんだと思いますよ。この生活・文化。生活とか文化について、なんかいろいろ見たり読んだりした。で、その時に、面白そうなものとしてキジムナーが出てきたと思うんですよ。さあ、そこでどうするかって言うとキ

ジムナーについてのこの、いろんな先行研究を読むわけですよええ。で読んでどうしたかって言うと、どっかでフィールドワークをやんなきゃいけないと。で、フィールドを、まあ、先行研究の中に出てきたフィールドで、まあ、有名そうところっていうか、そういうの選んでそこに行ってみたと。

日高:7月の合宿の時点では、先行研究を見て、おそらくキジムナー伝承がすごく具体的な地名とか、家の名前をあげて語られていて、単なる昔話というようなレベルではなくって、事実譚として語られているらしいっていうのがすごく引っかかったんじゃないですか。で、じゃあ実際にその「キジムナーがいた何々家」って言われている家の人に会って話を聞いたらどうなるかと。

島村:あー。そうですね。

日高:ところが、実際に行ってみると、現地の家の人というのは、語り方がこちらが期待していたような「この家ではこういう伝承が語られているんだよ」っていうような、快い語り方じゃなかったわけですよ。

島村:うん、うん。そう、そう。で、それにぶつかったことが……でそれがミーティングのよさっていうか。大事なのは、持ち帰ってきたときに、本人はむしろ困ったんでしょね。

日高:うん。

島村:ところがその困っていること自体が問題になるわけですよ。

日高:うんうん。

島村:で、その一、で、そこはやっぱりある種ミーティングというもののよさであって、教員がいることの意味もあるかもしれないけど、「そうじゃなくて、そこが問題なんだ」っていうことになって、そこから次の調査に入っていく。で……。

日高:そう、そう、「4.伝承に関わる人々」のところ、
「調査を進めていく際、私に「キジムナーのおかげで家が繁栄したと思われるのを嫌がる人もいるから気をつけた方がいい。」と忠告してくれる方もあった」ってありますよね。

島村:これですね、はい。そう。なので、これも、最初彼女は、遡って考えますと、キジムナーに興味を持ったときには当然文献の中に出てくるから、何て言うかなあ、キジムナーの語りというものが生々しく現地にあるというのはあまり思わなかったと思うんですよ。

日高:うん、うん。

島村:こういう物語に出てくるキジムナー。沖縄にはキジムナーがいる、本土にはカッパがいるみたいな。

日高:うん、うん。

島村:それで、えーと、そこが夏に合宿やったときに、いや、そうじゃなくてこれは語られてるんだから。で、

そのさっきね、おっしゃったみたいにその、場所とか、家の名前が特定されてるってことは完全に生きて語られてる。

日高：うん、うん。

島村：で、そこでやんなきゃいけないよって言って、現地で問題に、最初困って、それが問題になって調べていったという意味では……何ですか？ いいことだったっていうか、いいことっていうか、そのー……。さっきも言いましたように説話とか神話とか語りとかについての認識が変わっていくわけですよ、この作業をしていくことによって。これは本だけ読んでたならできないけど。やっぱり体得したっていうか、自分がそこに行ってみてわかることみたいな。

日高：うん、うん。

島村：そういう効果があったかもしれない。このような認識が変わったものっていうのは他にもあるんですね。



調査計画発表会 (2007.7.22)

戸田有希乃「マダン橋とマカン道 伝承の混同」

日高：伝承系のものだと戸田有希乃さんの「マダン橋とマカン道 伝承の混同」が。

島村：ああ、これ、思いつきそうですね。

日高：彼女は出発点からすごく変わりましたね。台風だかなんだかやるっていうので。合宿の時点ではまだ、あ、合宿の時点ではもうこのテーマになってましたっけ。7月の。

島村：いや、あの日もまだ津波とか言ってて。

日高：台風、津波からなぜここに。

島村：はい。それはですねえ、本人に語らせたいところですが。

日高：(笑い)

島村：彼女に成り代わりましてご説明しますと。

日高：ふん、ふん。

島村：何て言うか、沖縄といえば台風と思ったんでしょうねえ、最初。

日高：うん、うん。

島村：なんか、自分たちの狭い想像力の中で、でもなんか見つけなきゃいけないってなったときに、なんか知らないけど台風……。

日高：ふん、ふん。

島村：で、それだと上手くいくかもしれないけど、上手くいかないかもしれない。台風体験聞いたってしょうがないんじゃないの。何かよっぽど上手く面白いの出てきたら別だけど。そこでもうちょっとそれを、抽象度をあげるなり、大きな分類のカテゴリーの中で考えてみたらみたいな。で、災害とかっていったんですよ。そうしたら今度は津波ときた。ほー、津波か。津波もそうだな、うーん、なんだけど、あの一、あれ。何て言うのかなあ、何て言うの？ 何？ 津波……あの一、あの一、何だ？ 津波のねえ、神話があるんですよ。津波の……津波の語り。

日高：ほおー。

島村：津波が来たときに全部村がなくなっちゃったんだけど、残った兄妹がいてみたいやつ。で、合宿の時に、合宿をやってる議論の中でそこまでいったんだけど……。その後津波について彼女調べてきた。持ってきた。ありました津波の説話ですって。全部、先島諸島、つまり宮古島や石垣島。じゃあ石垣島とか行っていいですか。行っていいけど行ったらほんと一人で全部最後までってなったので、まあ、つまりこれも沖縄のときの……。沖縄でやるときの、その、フィールドのね。

日高：うん、うん、うん、うん。

島村：どこまでを、この調査実習の、フィールドにするか。かなりファジーにやってますよね。その方がいいから。那覇市に限定する必要はない。

日高：うん、うん、うん。

島村：だから後から出てきますけど、コザに行く人もいたし、お米を求めてずっと北の方から南にやってきた人もいて。でも石垣島はさすがにちょっと、みたいな。

日高：うん、うん。

島村：その辺の、何て言うかな？ 私たちのこの、その、方言もそうだし、民俗調査もそう、普通は何とか郡何々村って行って、その村に入って、こう、やっていくわけですよ。で、これはまあ、都市っていう面で。いや、都市だから……。都市っていうか那覇をやるから広がるんでしょうが。だから、だけどそういう面白さがありますし、今回この2年間続いたものの面白さっていうのはそういう意味で空間を限定しない、ある種の限定しつつ限定されていないっていう、広がっていくところに面白さがあるし、従来の研究方法、フィールドの設定の仕方では見えないものがこう、入って来ると。

日高：うん、うん、うん。

島村：そういう面白さはあるので、それはよかったんですけども。

日高：うん、うん。

島村：でも、でも、石垣島は遠いだろうと。

日高：うーん、うーん（笑い）

島村：それでどうしたか。津波は無理、無理っていうか、ないものはしょうがない。説話で。で、説話、説話って言ううちに、『日本伝説大系』かなんかを見ながら……何だろうな？ 幽霊みたいな話を見つけたんじゃないかと思ったんですけどねえ。それとねえ、橋かなあ。何らかの連想で想起してるんだと思います。彼女の中で。

日高：私の記憶の中では、橋の方が先だったような。

島村：あー、そうだ。幽霊じゃない。橋だ。何で橋になったんですって？

日高：えっとー、確か、その、津波の説話のような話を探す延長で、人柱を立てた橋というのを見つけてきて、そういう具体的な場所に着目するのならいけるっていう判断だったように思いますが。

島村：はい。

日高：事前にネットで調べていた段階では、その人柱を立てた橋、マダン橋が幽霊スポットとして語られていて。でもその時点では、まだこの橋と人柱と幽霊がどんなふうにつながってくるのかは、わかっていなかったわけですよ。

島村：そうそう。

日高：どうですか、この取りあげている材料と分析の仕方。これはかなりストーリーをつくってますよね。

島村：はい。そうです、そうです。これもですね、思い出しますとですねえ。まず最初は、こんなストーリーは最初っからあったわけじゃなくて。マダン橋に、マダン橋に幽霊が出るということをおお、面白いねー。で、まあ、都市伝説っぽい感じで。那覇だし、いけるかなっていう。で、インターネットで調べた。するとその段階で彼女はすでに気づいてたんだけど、その、ここに出ている通りの、マダン橋とマカン道というものの伝承がこう、混同されていると。で、まあでも、それは気づいていたんでしょが、それはあんまりたいしたこと……、そこは問題になるとはまだ思ってない。

日高：うん、うん、うん、うん。

島村：で、とりあえずマダン橋に行ってみた。で、初日彼女はかなりその橋の周りをぐるぐるしているんなとこで聞いたけど、でも、ま、思ったほど面白い話は出てこない。

日高：マダン橋の周辺で調査をしたときは、おそらく出会える人っていうのが年配の人で、その人たちにはそういう都市伝説的なものが伝わってなかったのか、

だから、思ったような伝承の混同とか、そういうのが聞き出せなかったんですね、たしか。それで、都市伝説ということだったら若い人じゃないかっていうので、ちょうど、私が翌日宜野湾市の沖縄国際大学の先生と学生さんに会いに行くことになっていて、一緒に行ってみよう。で、学生さんに聞くといろんな情報が得られて。じゃあ若い人の方からっていうのでまた那覇に戻って沖縄大学の学生さんにも話を聞いてっていうのをやっていくうちに、伝承の混同っていうのが、実際の語りの中に出てきたわけですよ。

島村：ええ。そうでしたね。で、気づいた。そう、そう、実はネットに出てたあれと同じ現象じゃないかと。

日高：うん、うん、うん。

島村：で、それも先ほど言いましたように、インターネットを一次資料として使うみたいな方法が、さっきのE-moaiと同様に、これは一次資料なんですよ。

日高：そう、そう、そう。

島村：で、それが役に立ったと。

日高：ネットの事例は「4.1 混同の事例」のところに載っていますね。

島村：そう、そう。そういうことなんですよ。

日高：だから、論文のストーリー上は事前の調査でこういうことに気づいていたから、それに基づいて、現地調査ではその混同が実際に起きているのかを尋ねてみたっていう書き方をしてますけど、実際には本人もそういう書き方をしつつ、これはまあ、論文としての体裁であって、最初からそれがわかっていて調査をしたわけではなく、試行錯誤していくうちにそこに行き着いたっていう感じ。

島村：ていうことは、まさにフィールドワーク。フィールドワークってそういうもんじゃないですか。

日高：そう、そう。最初に集めていた材料の何が引っかかってくるかっていうのは事前にはわからない部分があって、行ってみたらそこで符合しちゃうっていうのが……。

島村：そう、そう。そうですねー、そう。だから、という意味でもこれは成功したフィールドワークだと思いますよねえ。だからやっぱりそういうとこで、私たちはこれを指導したわけじゃないんだけど、まあ、何となくコメントが活かされ、……こうしろとは言っていないけど、何だろう？ 思い出させた、思い出さきっかけになったり。あの、ネットにあったこととかを思い出させるきっかけになったりとか。

日高：ふん、ふん、ふん。

島村：それから、まあちょっと、ストーリーを教え込んだわけではなくて、そのさっきおっしゃったように、じゃ、若い人の所行ってみたらとか。

日高：うん、うん。

島村：これはかなり上手く効果を発揮していると。

日高：うん、うん、うん。

島村：そんなレポートでした。

日高：はい。



フィールドワーク初日の巡見 (2007.9.2)

菅野里美「ウチナー弁当」

島村：で、ここまでくると次はどれでしょう。

日高：行ってみてまとまった、最終的にはまとまったな
ーって感じなのは、菅野里美さんの「ウチナー弁当」、
どうですか？

島村：はい。ウチナー弁当。そうですねえ、行ってみて、
はい。

日高：これも彼女自身は、最初にネットで調べてウチナー
弁当っていうのを見つけて、自分の知らないものだから
すごく注目しちゃったわけですけど、行ってみたら
沖縄の人はウチナー弁当なんて言わないんですね。
それは現地の人は、弁当はそんなもんだと思っている
から。それでウチナー弁当について聞きたいって言う
と、「何のこと？」っていう反応なので、拍子抜けして
からが、彼女のフィールドワークの始まりみたいな感
じでしたけど。

島村：はい。そうでしたね。で、まあ、その場合に、ま
あ、タイトル「ウチナー弁当」としているのは……。
ちょっとここはなかなか、現地の人が言ってるわけじ
ゃないタイトルを使っているというのは……。これ、
もし論文として書くんだったら、「ウチナー弁当」って
いう言い方はたぶんしない。

日高：ふん、ふん、ふん。

島村：これは、やっぱりあの、本土からの見方なんで。

日高：そう、そう。

島村：ま、まあ、取えてね。カギカッコ付きウチナー弁
当みたいな感じでとりあえずは報告してみましたって
ことで。それはそれで、今回はいいと思いますけどね。

日高：はい。

島村：で、それで、あの、はい。で、現地行ってみました。
で、彼女の場合は……うーんとー……これはあれ

ですね。ほんとに、何ですか？ 心を無にしてという
か……なん、何だろう？ とにかく行ってみて、難し
いことはわかんないけど、とにかくそこに行ってみて
観察してみたらわかったことを。で、じーっと観察す
ると発見があったと。で、その持ってきた発見が、私
たちの仕事としては、意味があるんだと、その発見は
と。そうするとその発見を次の発見、次の発見、発見
をいくつか重ねていきましたね。するとそれがたとえ
ば図2にあるような、弁当ストリートに並ぶ弁当店舗
なんです。ここに面白いのは、新人、大御所、新人と。
「新人」っていうのは確かに普通の新人だけど。「大御
所」なんていうのは、明らかにこれはフォークターム。
フォークタームたって、沖縄の人全体のフォークタ
ームじゃなくて、この弁当ストリートに集まる人の
中での用語。

日高：(笑い)うん、うん、うん。

島村：でも民俗誌ってのは、そういうフォークタームを
見つけて、そこにどんな意味が込められているのかを
やるのが民俗誌が成功する例ですから。ここで「大御
所」という民俗語彙をちゃんと聞き取ってそれを柱み
たいにして記述しているというのは、それを久茂地ル
ールと彼女言ってますけども、これは民俗誌としては
すごくいい、いい記述ですよ、これは。はい。

日高：うーん。

島村：それで、まあ、彼女のキャラクターもあるんでし
ょうけど、お弁当屋さん忙しいと言われつつ、何だ
か知らないけど最後は移動弁当販売の車に乗せてもら
ったりとかしていると。もう一つ面白いのは、そのお
もろ町というまさにあれですね。再開発された辺り、
新都心って言われている。で、あそこはもうほとんど
できあがっているように見えるけれども、実はよく見
ると建築中の建物がまだいっぱいある。で、そこにこ
のお弁当屋さんがやってくる。それは時間がやっぱり
オフィス街と違って、もう10時頃から、朝の10時ぐ
らいからも来るって書いてますけども。そういうところ
までいったのはなかなか面白いですねえ。はい。

日高：3日間いろんな観察をして、体験をしている中で、
どれを残すかっていうところで、一貫した話に最終的
にはなってますね。途中の段階ではほんとに観察の仕
方に関していろいろ迷っているというか、何を見れば
いいのか自体がわからないっていう状態だったのが、
ここに集約して行って。で、今まさに2007年9月の
この時点じゃないと記述できないような、このおもろ
町の工事現場なんかもそうですし……。

島村：そう、そう、そう。

日高：そういう「動き」のあるものをしっかり見てきて
記述したという感じはします。

島村：そーですねえ、そう思います。動き、動き、大事

です。これは、久茂地のね、これだって欲を言えばいつからこういうものが行われたのかって調べてほしかったとは思いますが。久茂地に弁当屋ができたのはいつかって。でもこれだっていつまであるかだってわからないし、長い時間のある時期っていう。そういう...

日高：で、おそらくもう、弁当ってこういうものだって、当たり前だと思っている現地の人は絶対に着目しないことですよ。

島村：その場合、昔では考えられないんですけど、本土からの観光客が沖縄の生活・文化に関心を持つようになって。かつてはですね、たとえば1980年代、わたしが沖縄で調査していた頃は本土から来る人観光客はみんな空港に降りますとね、そこからバスに乗りましてね、なんか、リゾートホテルにこう、行くわけですよ。そこで、その塀の中だけで過ごして、3日間過ごしてまた空港に行って帰る。これが沖縄の観光だったわけですよ。

日高：ふん、ふん。

島村：ところが、まあ、何ですかねえ、何だろう？ 2000年前後から沖縄の観光のあり方が違ってきて、今はほんとに現地の生活・文化が全部観光の対象になると。市場だけじゃなくて。だって、その、それこそ旅行した人たちのブログみたいな見ると、ウチナー弁当がそこに出てくる。だから彼女もそうしたものを見ていく中でそれを発見したわけだけど。それはブログの世界はやはり限界もある。それなりの方法意識をもってやる研究、フィールドワークと、観光客のブログとは同じではない。もっとも菅野さんはそこ、フィールドワークをやっていくうちに、工事現場まで行ってしまった。さすがにねえ、あのねえ、あのー、工事現場はブログには載らないだろうって。

日高：うん、うん。

島村：ここはフィールドワークしてるから意味がある。おもしろ町の建築現場でこのワゴン車でみんながお弁当買ってるおじさんたち……。こういう話はないんですよ、ブログには。だからやっぱり大事なんです、フィールドワークは。

日高：殺気立った様子っていうのが、こう、わかりますよ（笑い）

島村：そー（笑い）殺気立った。で、細かくよく調べてますよね。なんか、おまけにお茶とかくれるって……。

日高：そう、そう。

島村：そういう面白さとか。これはもう観察しなきゃわからないし、くり返しますけど、さっきの民俗語彙みたいな「大御所」なんていうのはその中にいかなきゃわからない。買ってる人だってわからないんですよ。

日高：（笑い）

島村：自分がだって大御所から買ってるなんてわかんないでしょ（笑い）

日高：（笑い）そう、そう、そう。

島村：なんかいいフィールドワークじゃないですか、菅野さん、もう。彼女も、最初からね、こういう展開を記述するとか、意識があったかわかんないですよ。つまり、その現場のフォークタムみたいなのを、ちゃんと聞き取ってきて、なんていうことまでは当初はおそらくイメージできてなくて、単に「沖縄の珍しいもの」を見てみたい、ということだったかもしれない。が、ミーティングの中で我々は一方的にこうしろとも言っていないけれども、ある程度、コメントとかやりとりをして、しかも他の人はどんな調査をやるのかなみたいなの、そのミーティングを重ねていきますとね、その中でなんとなくこういうことをやればいんだらうと。弁当屋の前でも、こういうことやればいんだらうっていうのがわかってきて。

日高：うん、うん。

島村：だからあの、そんな私たちあれですよええ、そこ行って民俗語彙聞き取ってこいなんて一言も言ってないでしょ。

日高：（笑い）どれが民俗語彙かってことが判断できるとは思いませんよ。

島村：そうですね。で、ともかく、ミーティングの中でやっぱり影響関係ってのはあるんですよ。

日高：うん、うん。

島村：そこでやっぱり明らかに成長しているわけですよ。それでフィールドに行って、だから上手くなった。あれ、ミーティングなしでやったら絶対できないし、個別指導したところでどうっていうもんでもなかったと思いますよ。これはいろんな準備してるみんなとやって中で身につけていったのかなと思いますねえ、はい。

日高：ただ、やっぱりまだ「素直だなあ」って思うのは「おわりに」の最後の「コンビニで販売されている弁当よりも、本土の弁当よりも弁当屋のあたたかい気配りが感じられる弁当だと思った」という締め方ですよええ。

島村：あー、このねえ、そう、この……こういう締め方を、みんなするんですよええ。

日高：しますね。

島村：うん、うん。必ずなんかよかったように締めなきゃいけない。

日高：そ、そ、そ、そ、そ、そ。

島村：だからねえ、予定調和しなきゃいけない、って思ってるんですよ、かれらは。民俗誌っていうのはね、民俗誌だけじゃなくて、論文では予定調和壊すから意味があるんじゃないですかー！ ねえ。

日高：うん、うん。

島村：んー。ほんと予定調和だ……。



那覇タワーから見る国際通り首里方面（2007.9.2）

遠藤由基「伝統調理器具シンメナービ」

日高：じゃあ、遠藤由基くんの「伝統調理器具シンメナービ」。

島村：あー、いいですねえ、上手いですねえ。弁当が来てこれ。はい。これはですねえ、物一個で、物から描くと。物を取りあげることによってそこからこう、いろいろと、さらに大きな世界を記述していくということで、成功しているし、その場合のその物もね、よくある物でやったって面白くなくて、着目したのが面白かったですよ、シンメナービ。で、きちっと細かく調べているし、売ってるところまでいってみたと。で、何となくこの、この場合はその一、フィールドワークの時系列的なですねえ、その進行過程とその記述がなんかこう、上手く一致しているところで読みやすさというか……ありますよねえ。

日高：はい。

島村：欲を言えば、たとえば沖縄の民具研究の中でこういう物体、物体っていうか、物質文化をどう扱うかみたいなことも勉強してほしかったと言えばそうだけど。まあ、でも、そういうよりも、くり返しますけど、一つの面白い「物」でどこまで面白く書けるかみたいなのはいい。いいと思いますよ、はい。

日高：レポートとして読むときに、その場で観察したことが漏れなく書かれていると、安心できますよね。写真16に「失敗」ってありますけど（笑い）

島村：（笑い）面白い、「失敗」と「成功」……、面白い。素晴らしい。安心できます。

日高：（笑い）「この日は四メー半を6個、三メーを8個つくっていたが、ほとんどが失敗していた」という記述があつて。

島村：これはいい。いい。あの、こういうところはねえ、あのねえ、あれですよ。さっき言った過剰……、ほんとは過剰じゃないんだけど。でもほら、私たち今笑い

ながら、笑うというのはある種の過剰性に反応しているわけなんだけど、でも情報としては何らかの意味がちゃんとあつて。むしろ過剰な部分の方が必要だったりするわけでしょ？

日高：うん、うん、うん。

島村：そう、この手のことができる人っていうのは確かに安心感があるんですよ。去年で言うと、去年の報告書に出てた仙道久忠くんが、「那覇の寄せ場」というので、あの、いわゆる日雇いのおじさんたちがたむろしているところで、おじさんが片手に持っていた発泡酒が端麗辛口何ミリリットルみたいなことまで彼は書いていて。私、彼が原稿書く前のフィールドノートを見せてもらって、コピーもらったんですけどねえ。たしかに彼はイラスト書いて……端麗辛口って書いて、で、こういうことはやっぱり必要なですよ。

日高：ふんふん。

島村：そのレベルまで書いてくれるとすごくいいですよ。その記述からきつと何か読み取れるのではないかな。

日高：遠藤くんの場合、鍋の製造過程っていうと、上手くいったケースをそのまま辿るっていうところを普通は書きちゃうように思うんですけど。

島村：そう、そう、そう、そう。

日高：こういう「失敗」っていうのを書くことで、実際に失敗というのが多いものだとか、それからこの日は晴れていたけど曇っていると湿気が多いから失敗が多くなるとか、そういうことを調査の際には聞いたわけじゃないですか。

島村：そう、そう、そう、そう、そう。

日高：で、そこを彼は削らなかつたわけですよ。ええ。

島村：そう、そう、そう、そう。いいですねえ。これはなかなかいいセンスじゃないですか。

日高：で、考察として面白いのは、製造法の変化によって鍋の名称の語源解釈が変わっていくというあたり。

島村：面白いですよ、これ、ほんと。面白い。だから、面白いからこの節、三段落だけで終わってほしくないなみたいな。

日高：（笑い）

島村：まあ、しょうがない。レポートですからしょうがないんだけど。

日高：（笑い）

島村：これもっとこう書ける……。だからねえ、これあれですねえ、過剰さもそうだけど、もっと書けるだろうってのはありますよね。

日高：書ける、うん、うん。

島村：あるんだけど。筆力なのか、時間なのか……、何ですか？ これは。筆力？ 何？

日高：この記述のバランスからすると、製造法とかを書

いてきて、で、この部分だけを拡大するというのがバランス的に難しかったのかもしれませんが。本来であれば、ここを一つのまとまった章にしてもよかったくらいだと思いますけどね。

島村：そう、そう。

日高：ただ、それをやるには材料がちょっと足りなかったのかもしれませんが。

島村：ああ、そう、そう。だって、よく考えたら3日間でやってる調査だから。

日高：そう、そう、そう。

島村：で、3日間ですべてはできないと。当然ですよ。だからこれは次に彼がどんなことをやってくれるか、ちょっと楽しみな。

日高：そうですね。



弁財天堂 (2007.9.3)

山本佑香「写真で見る糸満」

日高：何を取舍選択して書くかっていうので、山本佑香さんの「写真で見る糸満」。

島村：おおっ、糸満……。

日高：これは先生にお聞きしたかったんですけど、7月の時点の彼女の調査テーマですが、カードいっぱいキーワードを列挙して、その最後に「沖縄の海というのはかなりの「大文字」だけれども、その「大文字」のテーマをあえて選び、どこまで掘り下げて「小文字」にできるのか知りたいです」ってありますよね。この「大文字」「小文字」っていうのは、たぶん島村先生の授業で出てきた用語だと思いますが……。

島村：ええ、はい。そうですねえ。ちょうどこの頃ですね、授業で宮本常一を取りあげました。で、宮本常一というのは、『忘れられた日本人』なんかはそうですけど、あの人は理屈は言わない。で、ほんとにあの、現場の、現場で話者の語ったことだけを細かく書いていくんです。さっきの「大御所」なんていうのは「小文字」なんですよ。

日高：ふん、ふん、ふん。

島村：つまり、たとえばね、構造、社会構造とかね、親

族とかね、年中行事とか、シャーマニズムなんていう言い方もですね、「大文字」なんです。で、「大文字」っていうのは要するに、学者が使うことばやジャーナリストが使うことばで、それを使うことばによってなんかわかってしまうような気になってしまうことば。これはあの、佐野真一っていう人が、宮本常一の評伝を書いている中で言っていることですよ、「大文字」、「小文字」で、それに対して、まあ、多くの学者は「大文字」で語る。それに対して宮本常一というのは「小文字」、つまりそういう大きな概念ではなくて、現地の人のもうほんのちょっとささやかなことばで語られたことの中に重要なことがあると。で、これを「小文字」と言っていて、宮本常一は「小文字」の学問なんだと。で、もっと言うと、「小文字」が「大文字」をひっくり返すことだってあるわけですよ。

日高：うーん。

島村：なんとなくみんなが「大文字」使っているけど、実は「小文字」がそれをひっくり返す力を持つ場合があると。というようなことを授業でやっていたときに、あの頃みんながこれは「小文字」なのか「大文字」なのかすごい気にして……。

日高：(笑い)

島村：それがここに表れているわけですね。

日高：うーん。彼女がこう、他の人と違っているのは、この時点では、キーワードをいっぱい並べているわけですね。

島村：そう。

日高：これと実際に彼女がやったフィールドワークとその報告っていうのは、すごく近いものがありますね。研究成果発表会の段階では、見たものを時系列的にすべて並べて、犬に追っかけられた話なんかもしましたけど(笑い)。そういう中で最終的に出てきたこのレポートはどうですか？

島村：あの一、ま、これはですねえ、実を言っちゃうと本人自身も苦労して。というのは、さっき調査地の範囲の話をしました。ま、この海からきて、じゃあ、糸満行ってみようよってことで糸満に彼女は行った。ということで、那覇にそう簡単に帰って来れないから、行ったっきりになっちゃったと。電話でのやりとりはありましたけど。

日高：うん、うん、うん。

島村：で、というわけで、やっぱりミーティングで、その日持ってきた問題を、ここはこっちをやったほうがいいんじゃないのみたいな感じの掘り下げていくポイントが、どれを掘り下げるべきかが定められなかったという事情があるのは、そのフィールドとミーティングとの間の距離の問題があって、ちょっとかわいそうなんです。ええ。

日高：うん、うん。

島村：そんな中で、たとえばですね、犬に吠えられたというの、さっきの遠藤くんの「失敗」の例と同じですねえ、そういうことまでフィールドノートには書いた方がいいわけですよええ。で、もしかすると犬というのが村の犬とかねえ……柳田國男が「村の犬」について書いた文章⁵があって、村で飼われていた犬の話を書いています。たとえば、村の中で犬が歩いているのはどういうことだろうかとか、もしかしたら世相の変化でね、猫や犬が町からいなくなったらどうなるとか、糸満に猫はいたのかとか、そういう問題にもいくかもしれない。もしかしたらですね。というような、ある種のそれが、今みたいな話がミーティングの時にやりたいわけですよ。

日高：うん、うん、うん。

島村：それが彼女の場合できなかったのがちょっとかわいそうなんです。それとですね、山本さんは非常にこの、ちょっとこのカードの、夏の段階のこのカードでも他の人とちょっと発想っていうか書き方が違って、非常にユニークでしょ。海からビーチ、だんだんだんだん細かいところについていくのかな。

日高：連想関係でキーワードを。

島村：やってますよねえ。だから、対象がピタッとハマるとすごい面白いことになってたのかもしれないのですけど。まあ、あの、世間の狭さっていうかな……。大学2年生に言ってもしょうがないんだけど、「海」はないだろう、と。つまり彼女のこの思考方法は、ものがよければすごいいいことを生み出す思考方法を持ってるんだけど……。その視界に入ってくる対象がですね、なんか陳腐というか。

日高：うん、うん、うん。

島村：海とか、台風とか。しょうがないんですよ、世間が狭いから。なんだけど、これがなんかもうちょっと別のものだったら面白かったらうなとは思いますが、それがですね、山本さんの話としていうよりも、一般論としてですね。何を調査対象に選ぶのかって、考えてみれば大学2年生で大変なことなんですよ。対象を設定するまでが(笑い)。

日高：うん。

島村：だからその苦労がある。だけどみんな悩みながら先へ行こうと頑張るから、みんな視野が広がったりするわけですが。それでできあがって見たものがこれであると。

日高：ここにあがっているものは、ほぼ聞き書きみたいな形ですけど。これは、現地での言説としてはもう定着したものになってるんですか？ 2.2の糸満売り

の話とか水中眼鏡は糸満から世界に広まったとか。

島村：はい。糸満売りのことは、沖縄ではけっこうこれを取りあげた研究書もあるし、もうちょっとジャーナリストックに取りあげたものもあって。いろんな事実関係も書かれていたり、解釈もありますから。

日高：糸満の人たちの語りでは、漁業の技術を教えて、その技術をもって生活ができるようになったというふうに、決して人身売買ではなく、悪く捉えられて誤解されるのは困るっていう。こういう言説も定着したものの？

島村：これは聞き書きで書いてきているので、あると思いますし、でもこれがすべてではなくて、たぶん立場によって、それから当事者とそれを間接的に聞いて、でもそれを語り伝えている人がいたり、それからもっと言えば糸満売りにね、売られた当時の子どもとか。いろんな立場があるんで。ここだけをこう取りあげ……、これを取りあげるのはまあ、いいんだけど、これだけで、これだけのように思われるような記述になってはいけないんで、本来ならば糸満売りについては研究がけっこうあるので、研究っていうか、文献が。ですが、参考文献のリストにはそういうものが載ってないわけですよええ。これは彼女の帰ってきた後の仕事だったと思うんだけど。糸満売りについての研究や記述をある程度読んで、その中で自分が聞いてきたのはどの辺りの位置なのかみたいなのをやってそこを書き込むだけでも、もしかしたら面白いレポートになったかもしれない。今回はまあいいとして、発展の可能性としてはそういうことが。

日高：そう、そう。

島村：現地でのミーティングさえできてれば、糸満売りっていうことを聞いてきたときにこの言説、今言っていたみたいなことを現地で言っていて、じゃあ他の人にも糸満売り聞いてみようよ、糸満売りについての言説っていうのは、糸満の中ではどうなってるのって。そういう展開もあったかもしれない。

日高：うん、うん。

島村：まあ、遠かったから。でも、じゃあ、何で行かしたんだよって言うことだなんだけど、本人が行きたいって言ったんだから、糸満に。

日高：(笑い)

島村：ま、それもいいと思いますよ。糸満に行って。あの、最初はそのウミンチュの家にもう居候しろみたいなことから始まって。で、実際彼女ウミンチュじゃないけど、現地でいろいろ紹介してもらった上で、民宿に泊まった。それで私がそのミーティングの代わりに民宿へ電話をしたときに、あ、今これから何を作るって言ったかな？ なんか、料理を一緒にね、おばさんと作るんだとか言って。そういう感じで現地体験はし

⁵ 『明治大正史世相篇』所収。

てましてですね、ある種の参与観察みたいなことは成立してたわけだから。

日高：これがまったく最初の体験なので、次はどう動けるかっていうことの方針が立てばいいわけで。今回が完全である必要はないんですよ。

島村：そう、そう、そう。そうです、そうです。

日高：最後の「7.まとめ」のところに、「今回糸満で三日間にわたる調査をして、たくさんの人に話を伺うことができた。ただ、糸満の方言が全く分からず、せっかくのお話も100%聞き取ることができなかったのが残念な点であった」とありますけど、ああ、そういう状況だったんだな—ということがわかりますよね。

島村：そう、そう、そう。

日高：ほんとの研究者であれば事前準備なり、聞き取りができるような現地語の能力を持ったうえで現地に入るわけですけど、それをやらないで入っているわけだから。

島村：そう、そう、そう。

日高：その点ではちょっといろいろ補足をしていかないといけないのかなと思うんですけど。

島村：あー、はい、はい。

日高：「4.共同組織」のところで、「門」って書いて「ジョー」っていうのがありますけど、これは区画のことを指すのですか、それとも何でしょうね。あの町内会みたいなもの？

島村：いえ、あのたぶんですねえ、やっぱり筋。筋ですねえ。

日高：筋ですか。

島村：これはおそらく研究がたぶんあるんだと思うんですけど。これも引用してほしかった気もするんだけど。これって沖縄中にあるのではなくて、限定された地域のものだと思いますが、これについては多少の郷土史系の記述みたいなのはあると思うんですけど、研究の中でこのことを大きく取りあげたものはあまりないような気もしますが、これだけでもほんとはさっきみたいにもっとやったらもっと面白いものが出てくる。

日高：単に筋っていうことではなくって、そこに共同体ができていていうところから次の門中の話にいつているので……。

島村：うーん。

日高：これは現地の人から聞いた中で、彼女の中で結びつきがあるものだったんでしょうね。

島村：そう、そう、そう。そうです。

日高：だから、その結びつきが、この「ジョー」ってものが、空間的・機能的にどういう性質を持っているのかっていう情報が不足しているの。

島村：そうですよねえ。あの、門中の方はまさに血縁集団。で、ジョーの方は地縁なんだけど、なんか入り江

ごとに血縁集団の集まりみたいなのが書いてあって、こここのところ実際そうですよね、実際どうなっているのかはやってみたら面白くて、調べる価値がある。それこそほんとに調査する価値がある。で、地縁と血縁の関係性ですよ。

日高：ふんふん。

島村：そう。だからそういう意味ではこれは、「写真で見る糸満」で、さっきから、彼女の苦労話をしてるんだけど、じゃ、これが研究的にね、意味がないただの紀行文になっているかということそんなことはなくて、やっぱり対象の選択ということをやっているわけですよ。

日高：うん、うん、うん。

島村：糸満やるときには、ウミンチュの町、行事、白銀堂は基本として、次に「ジョー」。「ジョー」に着目しましたねと。これはそこに着目している、選択するという視点が入っている。で、つながりがなんとなく血縁地縁か、血縁地縁それはなんかわかんないけど、縁には違いない。つまり社会の問題であると。まあ、共同組織って言えるかもしれない、この組織。そこにつながっているっていうのは一つの視点ですよ、彼女なりの。で、「旧暦文化の町」というのも、これをね、年中行事として章立てしたらね、これはまあよくある話なんだけど。彼女は年中行事として章立てをしなかったところが面白くて。旧暦文化っていうものを章というか節というかに持ってきた。これはやっぱりその町の特色を、沖縄は全体的にそうだけど、特にここは漁村であって旧暦というのは重視されている。そこへ彼女なりの視点が入っている。で、最後にこれからっていうのも、単なるそれこそ予定調和じゃなくて、歩いたときに海人課(ウミンチュカ)に行ってみて、「何？海人課(ウミンチュカ)って？」というところで、海人課(ウミンチュカ)って明らかに行政が「これから」のことを意識しているわけですよ。ということから言うと、そこを彼女は書きたかったと。で、今みたいに見てくると、タイトルは「写真で見る糸満」になっていきますけど、なんとなくすでにもうここで彼女の視点も感じられるし、ある種の萌芽というか、これをもっとやったら一つのエスノグラフィーがね、糸満をこういうふうに取り取ってみたいみたいな、できそうですよね。

日高：ふん、ふん。

島村：だから、その、論理……論理っていうか、論の展開っていうところには至ってないけども、その前の段階としてなんとなくつながりみたいなものはあるんですよ。だから可能性を秘めたレポートということで、いいんじゃないでしょうか。

日高：もう一つちょっと補足で、「4.2 門中」のどこ

ろの共同墓の話ですけど、糸満から離れた地で亡くなった人を別に祭祀して、後で一緒に入れたりするんですか、これは。

島村：これはですね、いわゆる客死。いわゆる本土で言いますとね、「畳の上で死ねない」という言い方があるじゃないですか。で、沖縄の場合も自分の家で、家の中で亡くなるっていうのが理想なわけ。あるいは自分の村落で亡くなる。村の外にいることを「旅に出てる」と言い方しますねえ。その旅の、旅先で死ぬっていうのは異常な死であると、民俗世界の論理で言うとなかなかわけですよねえ。

日高：はい。

島村：で、そのね、客死っていうのかな、それに対しては霊魂的にちょっと不安定なものであると。つまり、何らかの未練を持っているとか。なので一定の儀礼的な操作が必要なんですよ。

日高：はあー。あ、そういう意味ですか。

島村：そう、そう、そう。そのためにはすぐに入れないとか、何ですかねえ、なんか、ちょっと調べなきゃわかんないけど、普通のことではないわけですよ。それからたとえばね、病気で亡くなったとか。特に伝染病系統。それから若くして死んだとか。子どもが死んだっていうときには、ちょっと普通と違うやり方をすると。

日高：ふーん。

島村：それが空間として表れているという、そういうことですね。

日高：はー。うーん。そういう背景的なところの記述が、もう少しほしいですね。見たものをそのまま聞いて、説明を受けたまま書いているみたいですけど、だから重要なところをちゃんと聞いてはいるんですけど、それが何を意味しているのかっていうところについて、もう少し情報収集してくれていると、ま、安心できるという(笑い)



首里城前 (2007.9.3)

島村恭則・卒論秘話

島村：それにしても、よくみんなテーマ絞ってやっってるなっていう。私なんて……、これちょっと他に、今まで書いたことないからここで語りたい!

日高：語りたいんですね。はい。

島村：ねっ。私の卒業論文は、大学4年生の10月15日の前の半月だから……、ん? ま、はっきり言って、10月1日ころ、ストーリーが決まりました。

日高：はい。

島村：そこから15日間で調べました。その前一体どれくらいフィールドにいたんだよって、7月1日からいたんだから。でー、泣きましたね、私は。テーマが見つからなくて。

日高:(笑い)先生、沖縄なんですよー。

島村：はい。

日高:卒論のフィールドが。どういうきっかけで沖縄に。

島村：ああ。(笑い)何で沖縄に行ったかと言いますと…

…。はい。当時は、1980年代、何て言うか、記号論。小松なんか先生の構造主義とかもそうでしたが、そういうのがはやっていた。なんか境界とかですね、その名残が……、なんとなく今でもあって、マダモ橋は境界かよ、みたいなね。ま、境界なんだけど。境界と言えば何かわかっちゃうような「大文字」言葉ですよ、境界っていうのは。で、あれが大好きだったわけですよー。でー、ね、境界。なんでもこう、境界。境界には霊が出るとか。

日高：うん、うん、うん。

島村：で、よくあるじゃないですか、構造主義とか、自然と文化の二項対立みたいな。シンメーナービだってたぶんなんかそれでやったらできると思いますよ。生の物と調理した物とか、なんかよくわかんないけど。それで頭がいっぱいだったわけですよ。

日高：ふん、ふん、ふん。

島村：頭の中がもう、なんかもうね、過剰にそうなって、世の中が、すべてがそう見えるみたいな(笑い)。

日高:(笑い)

島村：でー、そのようなことを民俗学研究会っていうのがありましてね、大学に。國學院大學にありまして。

日高：はい。

島村：それでね、そこに行ってたんですよ。かなり早い時期から行ってましたよ。大学1年生の時から。で、けっこうちゃんとした研究会で、いろんな他大学からも学生が来てたんですよ。で、よく年に2回調査行って。で、発表したりなんかいろいろ。そのときにねえ、酒飲んでいる時に、前にいたのは明治大学からきていた私より2年上か、女の先輩で、私が記号論みたいな話をさかんにした。そう、そう、柿の木の話、思い出しちゃった。柿の木っていうのが植わっているのは、

あれは境界なんだって言ってたんですよ。

日高：ほー。

島村：柿の木が境界。あの世とこの世の境界で。「かき」だし。

日高：ほー。

島村：垣根の「かき」だからみたいなの。

日高：ほーほーほー。

島村：(笑い) 語呂合わせ。

日高：(笑い) ふーん。

島村：柿の木は境界……。で、そんなね、記号論とかいって本当は誰もわかんないで言ってるんですよ。記号論が何かなんて(笑い)

日高：(笑い) ふんふん。

島村：とりあえず構造主義とか、記号論とかね。そして、その先輩にそんなのやったら歩かなきゃだめじゃない、みたいに言われた。そうだなと思ったんだけど。でも、じゃあ、あんた歩いて何やってんのっていうか、あんた行政調査ばかりやってるじゃない。市町村史書く、要するに項目羅列のね。

日高：ふーん。

島村：で、なんかこう、気分悪かったんですよ。それがねえ。

日高：何年生の時に？

島村：大学2年。

日高：あー、2年生の時。

島村：水曜で……。2年。で、水曜日に、水曜日と土曜日にその、集まってたわけです。水曜日の夜の10時頃じゃないですか、どっかの居酒屋で。家に帰りましてね、なんかこう、モヤモヤしている。

日高：うーん。うん、うん、うん、うん。

島村：あー、えー、で、次の日。次の日の朝ぐらいに。あっ、よーし、沖縄行こ。とりあえず行ったことないから。

日高：(笑い)

島村：要するに、あいつに勝ちたい、勝ちたいわけじゃないけど、そこまで言うんだったら歩いてやろうじゃないかと。

日高：うーん。

島村：ていうか、歩くのは結構歩いてましたけど。ただ、歩いたものが全部柿の木に見えてただけだから。

日高：(笑い)

島村：それで、飛行機に、生まれて初めて飛行機に乗った。(笑い)

日高：(笑い) それが初めてですか？

島村：日本航空。そう、そう。恥ずかしいけど。

日高：(笑い)

島村：今やあの一、スターアライアンスゴールド会員ですけどね。

日高：(笑い)

島村：(笑い) 大学2年生で飛行機乗る。飛行機……。飛行機ってどうやって乗るのかな、みたいなの。それであるころはね、ネットでもないし電話でもなくて。やっぱりね、1980年代というのは飛行機はですねえ、日本航空の支店に行って買うみたいなのリがやっぱりあった。で、まあ、旅行会社で買うっていうのもあったけど。で、スカイメイト⁶というものがどうやらあるらしいと。なんか一生懸命見てて。

日高：うん、うん。

島村：そのスカイメイトにまず申し込まなきゃならない。日本航空行って、渋谷駅かなんかの……。で、その時予約もして、で、これが木曜日。ねっ。水曜日に言われて、木曜日に予約し、で、土曜日に行ったのが宮古島。てゆうか、那覇も行ったけど。

日高：ほー。

島村：那覇行って、宮古島、ああ、久高島行ったんだ、そういえば。

日高：ほー(笑い)

島村：で、那覇行ってですねえ、那覇の……。ま、那覇も面白かったんだけど。次の日久高島に。春、ね。春先でしたねえ。ちょうど今頃じゃないかなあ。3月頃ですよ、たぶん。

日高：ほー。

島村：3年生になってないから。それで久高島行きましたね。あの一、道？ ずーっとお墓の方の道、あそこずーっと歩いていって一番端まで行った。端まで行ってその時に、あ、これ、那覇自体がもう異文化だったけど、これはもうなんか、あああ、みたいなの。ニライカナイ。誰もいないし。

日高：うん、うん、うん、うん。

島村：なんかポーっと。折口信夫がですねえ、なんかそのやっぱり岬でですねえ、明治45年のことなんだけど、大坂の今宮中学の教員になったとき教え子を連れて志摩、熊野を旅した。大王ヶ崎というところがあって、そこに行ったときに道に迷うらしいんですけど、その大王ヶ崎で、なんかこう、ポーっと、恍惚状態になる。

日高：ふーん。

島村：で、たぶんその時にまあ、歌人ですからいろんなことを思う……。あるんでしょうけども、来訪神とかさっきのナマハゲみたいなのあいうのがバーンとこう一つ、つまりミサキですか。「御」先。神の来る先。で、大王ヶ崎の向こうは、常世の国、沖縄で言ったらニライカナイだっていうのが、なんか折口信夫にとってのそれなんだけど。それは私とはレベルが違いますが。

⁶ 満12歳以上22歳未満が対象の割引制度。

私は久高島の先端で、なんかこう、ニライカナイを直感した。

日高：はー。

島村：ま、単純ですからね。で、その後宮古島に行きまして、御嶽の中に間違っちゃって、でなんか神様に怒られたのか、なんか雷か、ガー、みたいな。怖かったんです。で宮古島。私あの、宮古島の、あ、池間島ってところに行ったときに、勝連民宿という民宿がありましてね。だれも観光客なんか来ないから。で、オジイとオバアがいて、60ぐらいでしょうねえ、今考えると。オジイは漁に行くわけですよ。そうすると、そこで2泊、3泊かな？ 2泊ぐらいしてたんだけど。でも最初の日は泡盛、漁師のオジイとガーッと飲んでねえ。で、次の日にね、二日酔いだし、島の中ウロウロもしたけど、まあいいやって言って、民宿でおばさんの近くに、居間みたいなところにずっといたんですよ。そうするとねえ、夕方の7時頃に、「あ、帰ってきた」っておばさんが言うわけですよ。いや帰っていない。音で、船の音が海の音の向こうで聞こえる。それはさっきの細かい話の部分ですよ。

日高：ふーん、ふん、ふん、ふん、ふん。

島村：漁船の音が聞こえる。私には聞こえない。

日高：はあー。

島村：で、その人には聞こえる。で、なるほど、なんか30分くらいしたらオジイが現れた。そういうのはだから、細かい話の大事さなんだけど。それで、はい、はい。それで話を進めちゃいますと。それが沖縄だったんですけど。そんなことがあって、それから沖縄に通いだした。

日高：それは2年生の終わりの時期ですね。3年生の時も沖縄に行ってたんですか？

島村：3年生の時も、3年生の時はずねえ……、お金がそんなにないですからねえ。高かったんですよ、当時飛行機は。3年になるでしょ、なって、その後その民俗学研究会っていうのは年に2回調査に行くから、どっか鹿児島島の志布志、ああ、思い出した、思い出した。そのころに、今度はねえ、奄美に行くんですよ。

日高：ふうーん。

島村：で、志布志での共同調査のあと、一人で船に乗ってね。そのころに卒論どうしようかな、みたいな考えたときに、なんかねえ、これは仕方ないけど国文学科でしたから。恥ずかしながら。どうしよう、卒論っていう。だって大学はあんまり行ってないですからね。

日高：(笑い)

島村：で、あの、困ったわけですよ。卒論どうしよ、みたいな。でも、まあ、なんとかなるんじゃないの、みたいな。それで、でも、一応なんとなくなんか保険かけるわけじゃないけど、説話ならいけるだろう、みた

いなね(笑い)

日高：うーん。

島村：そのときに私はやっぱりですねえ、まあ、みんなそうだと思うんだけど、最終的にまともな研究者になった人は。あのねえ、一個の卒論のテーマとか、それは卒論でしょうと。私がやろうとしてたのは民俗学をやろうとしてたわけで、別にー、じゃあ卒論はそれでもね、いい。全身民俗学。だから、全体なわけですよ。それはねえ、個別のねえ、卒業論文とか、修士論文とか、博士論文とか、本当はどうでもいいんですよ。

日高：ううーん。

島村：全身民俗学だから。で、でもまあ、だから、それはともかく、卒論だからって考えた。で、その時に道祖神。本土の。道祖神を求めて長野県とかをずーっと、三信遠⁷って言われる天竜川沿いにですねえ、新野とかあるじゃないですか、設楽郡っていうんですか？ 歩いたりして面白かったですよ。その時はねえ、結構、気分は折口信夫。折口信夫はあの辺歩いてますから。ほんと折口信夫が来たときに一日8時間本を読めと言われた人とかそういうなんか町会議員か、町長さんまでやった人なんだけど、親切にしてくれてね。その人にたまたま会ったんだけど。で、いろんな案内してくれて。道祖神は……そういえば確かあそこある、みたいなね。で、そのあと、葉書をやりとりしたんですけど。あの頃はやっぱり面白いですねえ。たぶん日高先生のフィールドの間にもそういう。葉書って、ほら、話者とのやりとりってあったじゃないですか。ま、今もあるんだと思うんだけど(笑い)

日高：(笑い)

島村：葉書。何回もなんか、知らないうちに文通みたいになっちゃって、そのおじいさんと。で、あのー。はい、はい。それで、まあだけど、卒論のストーリーはできない。ここで今話つながってんですけど。

日高：ふん、ふん。

島村：ま、一人でやってたし。ストーリーができない。道祖神やってたけど、そりゃ道祖神自体はあるかもしれない。それにまつわる神話や説話の残骸みたいなのもありますけど。それが何だっていうの、みたいな。誰も教えてくれる人いないから。ていうか教わるつもりもなかったけど(笑い)

日高：うーん(笑い)

島村：それで、まあ、いろんなことやってたんですよ。なんかね。

日高：で、それは長野県でフィールドワークしてたっていうこと？

島村：いやいや、そうじゃなくて。たまたまあの辺に道

⁷ 三河・信州・遠州。

祖神の分布があるから。一箇所集中してやるのは、それはやったわけですよ、サークルで。民俗誌の報告書を作った。それはあるんですけどね。じゃなくて自分のテーマとして歩いて、要するに古い昔の折口信夫的にそこだけを聞いて、次の村行くみたいな。

日高：ふーん。

島村：てゆうか、あれは自分に酔ってただけで。

日高：(笑い)

島村：山の、ずーっと下りてくるわけですよ。山の中を。ずーっと一人で歩いて。

日高：んーんん。

島村：自分に酔ってるわけ。折口信夫なんですよ、気分は。ね。それでバス停のバスがなくなっちゃったりね。一日2本しかなくてもうない。だからずーっとトボトボトボトボ歩いたりとか。そんなことやってたのを、四国でもやってましてね。実は私は明日、高知に。

日高：ご出張なんですよ。

島村：7時30分発の飛行機で行くんですが。高知も行ってたんですよ、そういえば私そのころちょうど。小松和彦の「いざなぎ流⁸」の研究を読んでねえ。物部村という、その有名な村に行きましてですねえ。それはこう、気分は折口信夫でなんか木賃宿みたいなのところに一人泊まるみたいだねえ、あったんですけど、それはいいんですけど。でそんなことを大学3年生のときにやっていて、今度は志布志に行きましてですねえ。で、そこでの共同調査が終わってから鹿児島から船に乗る。その時、今度は、飛行機じゃなくて船じゃなきゃ駄目になってるわけよ。頭の中は。やっぱり。

日高：うんうん。

島村：船！船！

日高：「海上の道」ですか。

島村：「海上の道」。そうそうそう(笑い)。それでこう、奄美、着きまして、で、加計呂麻島に行きまして、そこで面白いのが考現学的な観察なんですよ。なんか、中古のバスみたいなので、運転手さんも、さっきまで畑にいた人が運転して、終わったら、また畑に戻る、みたいな感じの路線バス。あの、加計呂麻島は、島の真ん中に山がある。その山をはさんで瀬相というところの港から西阿室という集落までがバス。そのバスの中で、お客さんが、金がないとか言って、「お金ないから払われへんわー」とか言って、すごい関西弁。ま、今思えば、おそらく、まあ、尼崎の言葉でしょうね。

日高：(笑い)

島村：要するに、奄美の人たちは、たとえば尼崎の武庫川沿いに、ずーっと住むんですよ。

日高：ふうん。

島村：武庫川沿い。で、出稼ぎがすごいでしょ？ だから加計呂麻島に限らず、奄美の人たちは、関西に行ってる人口が相当ありまして、それが、ちょうど私が行ったときは、夏休みだから、フィールドワークやったの。それで、その後に行ってるから。それで、お盆、の時期なんでしょうね。だから里帰りしているわけ。で、その中には、まあ、向こうに行ってる、多少の、何だろう、30ぐらいで、ちょっと、実家帰ってるけど、まあ、大阪のほうで、世間にもまれて、金がなくてもバス乗るぐらいになっちゃった人が、里帰りのバスの中で関西弁でしゃべった。あるいは他にもシマ(集落)の中で関西弁が結構聞こえてきたわけですよ。

日高：ふんふん。

島村：それでその奄美に行ったとき、加藤悠さんが報告の中で引用している山下欣一先生というですね、私の私淑している、まだ生きてますけどね、あの、『奄美説話の研究』⁹という本を書いた先生がいますね。法政大学出版局から出ているんですけど、本土では買えないんだけど、古本屋に行けばあるんだけど、奄美にだと地元についての本だからでしょうけど普通の本屋にも置いてあるわけですよ。もう絶版になってるのに、みたいな買って。それが、もう、何だろうなあ。ある種モデルみたいな。宮田登¹⁰の前は山下欣一なんですよ。

日高：うんうん。(笑い)

島村：いや、前とかいう問題じゃなくて、平行してるんだけど。奄美生まれの人なんですよ。最後は鹿児島経済大学の先生だったんだけど。

日高：うんうん。

島村：で、その山下欣一先生の本が、この彼女が使ってる本なんですよ。要するに南島の神話の研究者だから。で、その奄美行きまして、何だっけ？

日高：道祖神ではなく、やっぱり、こう、説話、神話っていう？

島村：あー、それが、どうつながるかという、それが、夏でしょ？で、冬に、3年生の冬に、またまた道祖神巡りをしているわけですよ。ちょっとずつ。でも、できるわけがなくて。そんなものは。それで、じゃあ、やっぱり沖縄だろうと。わかんないけど、とにかくもう沖縄に暮らすことに意味があると。そこで問題を発見しよう。ただ、沖縄の文献はいっぱい読みましたけどね。あの一、かなり読んだけど。相当読んだけど。でも、自分でどうするかっていうのはわかんない。

日高：うんうん。

島村：でも、まあ、それこそ加藤悠さんの感じですよ。

⁹ 山下欣一(1979)『奄美説話の研究』法政大学出版局

¹⁰ 民俗学者。1936～2000年。筑波大学大学院における島村の指導教授。

⁸ 地方の陰陽道。

現地で、どう神話が語られてるかを、まず聞き取って、そこからみたいなのをやって。それで宮古島で、えーとなんだっけ、下見じゃないけど、予備調査で、狩俣という結構有名な集落なんですけど、そこにうんと一、大学3年生のえーと、終わりの頃春休み3月に、つまり最初に行った、2年生で行った1年後、その間にだから1回奄美に、あ、もう1回沖縄行ってたんだな。だから冬に行ってたんですよ。冬行って春休み行ってみたいな。

日高：はあ。

島村：だったと思います。それで、とにかくその、一升瓶を持って自治会長の所に行くわけですね。それで、すいません。あの7月1日から住みたいんですけど、と言って。で、空き家を紹介してもらって7月からは住み込み。で、青年会。嵯峨佳菜さんの調べたあの世界ですよ。毎日泡盛飲んで、ずっとやっていった。7月が終わる。仲良くなる。で、お婆さんたちの所にも行って、司祭者たちだから。そこで一緒にお祭りに参加する。でノートにはいっぱいたまっていく。

日高：んんん。

島村：ね、で8月も1ヶ月住んだ。さあ、できない。まだ行けるだろう。9月にもなった。まだ涼しくはならないけど、もうちょっと涼しいかな。で十五夜満月の日に、旧暦8月15日ですよ。綱引きをやるわけですね。綱引きやってるうちにこう複雑なあれなんだけど、ある種感動してるわけですよ。その民俗儀礼を本当に現地で一緒にやっている。それともう一つは帰らなきゃいけない時期が迫っている、悲しい。でも人間ずるいですからね。たぶんね、もう一つは不安なのね、ストーリーが出来ないから。(笑い)

日高：うんうんうん。(笑い)

島村：どうしようみたいなの。就職活動してないでしょ。

日高：うん。(笑い)

島村：してないし、したってできるわけない。就職なんか。大学院は当時の、ね、ほら、私たちの頃はやっぱり、大学院入るのは難しかったじゃないですか。落ちるかもしれないっていうか、落ちるほうが普通だと思ってる。それよりも何よりも、とにかくストーリーが出来ない。でね、一人その住んでた家に帰ってきてから、バアーみたいなの、泣いて、泣くんですよ一人!

日高：うーん、うんうん。

島村：で、もう次の日また調査するけど。でそのうち、その間にもういるんなストーリー、この人たちがやってるみたいなの。もう考えて考えて、これでいけるかな、これでも違うな、とか変なね、分析してみたり、いっぱいなんか、カードを作ったり、なんか上手いかな。発見がないんですね。

日高：何を主に観察してたんですか。

島村：いや、その主、主にがあればストーリーができる。

日高：あー、う、う、うん。経験する……見るものすべてを、という感じ?

島村：そうですね、そうですね。だから、そうですね。魚屋さんが行商してる魚の種類とかね。ばかなんだ。

日高：(笑い)ほおーっ。

島村：(笑い)一人ぼっちでやると、そうなっちゃう。で、そこで上手くいけばすごいことだけど、失敗したら可哀相って話ですよ。

日高：うーん。

島村：魚屋さん。とかもうあらゆることを記録するだけ。でも、でも一方で先行研究みたいなのはやっぱり読んでたからどっかではこう、なにかある、それはわかってるんだけど。

日高：うんうんうん。

島村：で、神話と儀礼の関係みたいなのを言って、なんかもっともらしいことをこう、書いて考えてるんだけど、ま当たり前ですよ、儀礼が先か神話が先かみたいなのを考えて、答えが出るわけない。

日高：ふんふんふん。

島村：でもやっぱり我慢、我慢はしてなかったけど、その蓄積って言うのは大事で、ふっとつながると。この時にですね、古い戦前のね、『沖縄文化の遺宝』¹¹っていう、あの一、それこそ民家とか、御嶽にある小屋とか藁葺きの住宅とかを記録した鎌倉芳太郎というですね、東京美術学校の先生が書いたものがある。それ、それこそ高い本で、そういうのがあるの。図書館で、県立図書館の宮古分館で見て。へーと思った時に、あ、狩俣の事も出てるといって、コピーを取っていた。で、そこには御嶽のまあ拝所という、拝むところ。で香炉の配置がこう描かれてありまして。神様を象徴する、それを見て。そうするとああ、香炉、ああ、あれ、みたいなの。これはいつも私が儀式の時見る香炉だよ。

日高：うん。

島村：でも私が目の前でいつも見ているのは、神様は3つ。香炉が3つある、でもこの本には2つしかない。ああ、そういえば他にも琉球大学のそういうサークルが調べた報告書とかなんととかあるなあ。と、ああ2つ、これも2つ、2つ。でも今は3つ並んでいるみたいなの。これは何? この間に何が起きたんだろうと。なんだかこれはおもしろいなあ。で、早速おばあさんたちに聞きました。だからさっきの伝承のなんかあれと同じですよ。伝承が人によって伝えられていたり伝えられていなかったり、立場によってその一、語り方が違うとか。空白があったりとか。でもその人たちは、「いやそんなことはない、これは昔からあるから」と信じて

¹¹ 鎌倉芳太郎(1982)『沖縄文化の遺宝』岩波書店

いる。で、それがさっきの民俗語彙みたいな。「ンキャヌママ」とかです、ね。「ニダティママ」って言うんですよ、宮古の言葉で。「ンキャ」っていうのはですね、昔話を「ンキャヌ話」とかなんとか言うんだけど、「ンキャ」って言うのは「昔」ね。「昔のまま」。それから、ね、「ニダテル」っていうのは「根立てる」なんですよ、「根立てたまま」。それね、つまり始原を表わす、神話的な始原を。ね？

日高：うんうん。

島村：だから現地の人は、香炉の数や配置は「始原のまま」で変化しないと信じている。でもそこでちょっとやっぱりこちらは変化に気づいているから。だけどさすがに「これには2つですけど」とはさすがに見せられなかった。なんかぶち壊しになるような気がして。これはいけるかもしれない。それで、聞き取りすると、絶対に昔から、これは変えちゃいけない、みたいなことを言うわけですよ。じゃあ神役っていうのは交代しますから前の世代、その前の世代みたいな、村の中でも引退してるから、普通にその辺のお婆さんになってるんだけど、訪ねて行って、聞いて回って見たらどうなるか。で、あるところでぶつかった。それは20年前に、あそこにユタがいるだろうと。あのユタが勝手に来て置いたんだよみたいな。みんな私たちあの時反対したんだけど勝手に置いて。でその時第三者の占い師の所に、町、平良の町に行って聞いて、それをまあそういう時にその、葛藤状態を解決する方法っていうのが編み出されていて、3人の所に行って良いて言われたら受け入れようみたいな。そういうルールみたいなのが多少あったんですね。で受け入れた結果、ところが一度受け入れると、それが交代すると知識が伝わらないから。その部分の知識は。そうすると、それが受け入れられていって、ユタの言っていた新たな3つめの神様というのが、共同体の神になっていった。これに気づいた、気づいたっていうかわかった。これでいけるなあって思ったのが、10月の1日。帰るのは10月15日なんです。卒論の提出がだつて12月の15日か何かだったんですよ。で、さすがに、なんか、出来なくても出来ても書かなきゃいけないと思ってたから、一応帰ろうと思ってたから。それで大急ぎで、だから逆に言うとそうすると1週間で出来るんですよ。当たり前だけど、ストーリーが出来れば何を調べればいいのか分かる。で、類似の例、事例を2つぐらい、探すとあるわけですよ。そこがおもしろいでしょ。ほら類似の事例があるわけだから、同じようなことが起きてるわけですよ。それで、これはいけると。これはおもしろいなって思って。なら、やっぱり上手く書

けましたね¹²。

日高：ほあう……。

島村：だからあの、ぎりぎり。だから何が言いたかったかと言うと、この人たちはすごいなと。ねえ、こんなこと、私は勝手に1人であの、何だっけ、自分に酔って自己陶酔して、折口信夫とか言っていたんだよ。恥ずかしいけど。今考えたら恥ずかしい。この人たちはすごいですよ。やっぱり。まあ授業としてやるからなんだけど。ただただね、あえてここで言えば、これもいいけどもこれだけが全てじゃなくて、1人で1人ぼっちで模索することも。(笑い)

日高：それはそうですよ。目に入っているものに意味づけするのって、自分の主体的なこう、行為じゃないですか。それを、この授業の中では、意味づけする部分をかなり支援してますよね。

島村：そうそうそうそう。

日高：教員の側で。何に意味があるかっていうのがわかっていない段階、目には入っていても意識に上っていない段階のものを、こういうレポートの形になるところまで、やっぱり教員の側で支援する部分があるわけ。

島村：そう。

日高：それが本当に一人で出来るようになるのが最終的な目標。

島村：そう。そうなんです。だから、どっかの時点で独り立ちするみたいな。そのさじ加減を教員が間違えると、失敗になっちゃうんですよ。

日高：うんうんうん。

島村：ま、幸いなことに、私たちが、自分たちはそういうシステムみたいな中でも、もちろん大学のときでもそれはあったから、そういうシステムも経験してますけど。そうじゃないところも当然、経験してるので。ま、わかった上でやってますから。フィールドワークとは何かをわかった上でこれをやってるので、まあ、大丈夫ではあると思いますけれども。はい。だから大したもんですよ。この人たちは。

日高：(笑い)

島村：で、だから、この糸満の山本さんも頑張ったわけですよ。そうすると、次につながるのは誰ですか。

¹² 島村恭則(1993)「民間巫者の神話的世界と村落祭祀体系の改変 宮古島狩俣の事例」『日本民俗学』194



守礼門 (2007.9.3)

武田亜沙美「米軍占領とコザの発展 女性の暮らしぶりから見たコザの街」

日高：じゃあ、特定の地域を扱っているっていうので、武田亜沙美さんの「米軍占領とコザの発展 女性の暮らしぶりから見たコザの街」

島村：はい、彼女の場合は、これもですね、頭でっかちで考える癖があるような、「環境」とか最初言ってたんですね。環境。でも抽象的でしょ。環境は、具体的になって言ったら、次は「女性」。環境の次はジェンダーかよみたいな。いや、いいけど。大事だけど。で、まあ、準備の段階では、いろいろ読んでも、まあ、本人の性格もあって、読んでもピンとこなかったんでしょね。ある意味でそれでもいいですよ。で、現地行ったら、その代わり現地でどれだけアクティビティがあるかないかで左右される。で、彼女の場合は幸いまして、行ったら、行ってみたら上手いっちゃったみたい。いろんなインフォーマントに出会えて。で、その中で、時間がもっとあればね、その人たちと一緒に出来たんだろうなと。思います。はい。……よく言えばですね。悪く言うのは日高先生にお願いします。批判的に……。

日高：うーん。このタイプのものって、「研究」なのか、それとも何でしょうね。ジャーナリスティックな意味合いの強い、うーん、雑誌かなんかの「どこどこに潜入」みたいな？ そういうのって、どう評価すればいいの、私はわかんないですよ。

島村：という？

日高：ある地域を対象にするとか、人に注目するとか、こう、島村先生のいうエスノグラフィーの記述って、どういう記述ができれば成功例だと言えるのかと。

島村：はい。

日高：これが成功例なんだとすると、どの部分が。

島村：成功例なのか。ああ、なるほど。まあ、成功例に向かっているものというか、まあ、あれでしょうけども、っていうか、本当に成功するというのは、ま、私の考える民俗学ではっていう意味ですよ。あのね、そ

れがジャーナリズムであっても、まあ、もしかしたら、いいかもしれないっていうのは、もしそれだったらいいって言うのは、やっぱりさっき言った「小文字」ですよ。このお風呂やさんの「何とか湯」のオバアが語った一言が、あるステレオタイプ、とまでは言いませんけど、その沖縄のコザの女性史みたいのを、ガラッと変えるとまではいかないまでも、ちょっと、こう、そうじゃない世界があるというか、「小文字」の言葉から広がる何かがあると、そこが成功例なんです。じゃあ、ジャーナリズムとどこが違うのかっていうと、はっきり言って、宮本常一ですね。ジャーナリストたちは宮本常一をすごい好きだから。結局、「小文字」の記述の持つ力の凄さを、ジャーナリズムも求めているから。じゃ、それって、学問ですか、みたいに言うと、んん、まあ、民俗学ってそういう学問なんで。しょうがないよ、みたいな(笑)。だから、本来はここで、この「小文字」っていうか、その、そういう、何か出てくると…。

日高：うんうん。

島村：で、おそらく、彼女なりに、例えば、この、何ですか、美里地区とかね、えー、ありますよね。何ていうの、その、風俗営業とかね。で、これが、興味本位で行ったっていう面がゼロかどうかは、わかりません。それは、だけど、もし、ある意味では、何らかのね、その、自分が読んで知っていることの、その先とか、その裏側とか、それを知りたい。まあ、知りたいっていうか、そこから見る必要があると、彼女なりに思っていた。で、その時はどうしていいかわかんないから、とりあえず、まあ、こう、パーンとそういうのに当たりそうところで言うと、非日常的な時空である。っていうことで、例えばこの美里地区に行ったんだろうと思いますけど。うん。

日高：うーん。私がさっきのような問いを発してしまうのはですね、その、「小文字」の世界を描いた後に出てくる結論っていうのが、このレポートの最後の「おわりに」のところですけど、米軍基地をなくすべきだと思っていたけど、基地がなくてはコザは成り立たないことを理解したとか、それから、沖縄の女性の強さであるとか、そういう、何か、こう、よくある言説でまとめようとしている感じがして……。既存のジャーナリスティックな言説を無意識のうちに再生産しているっていう。

島村：ああ……。そうそう。悪い意味でのジャーナリズムなんですよ。で、その、まとめなきゃいけないという強迫観念みたいなものがずーっとあるんだと思うんですよ。高校のときから。レポートというのは、まとめないと、なんか、ダメなんじゃないか、みたいな。たぶんあるわけで。それはまあ、レポートという

ものの多くはそういうものを要求しているのかもしれないけど、まあ、それに洗脳されてるんだと思いますけど、それにしても確かに、まとめがちょっと、確かに陳腐ですね。これは。はっきり言って。で、そうねえ.....。

日高：彼女が経験したことは、3日間、すごく、こう、充実したというか、濃い3日間を過ごしてきたわけで、それが盛り込まれてはいるんですけども、そこから得た何かを述べなきゃいけないと思うと、こういう、「おわりに」のようなまとめ方をしてしまうんだろうなと。

島村：そうですね。

日高：でも、その「体験から得た何か」というのが、まだ、こう、島村先生がよくおっしゃる「内面化」ですよねえ、その、自分の問題として熟成されていないから、なんだか表層的な言説でまとめてしまう.....。

島村：そうですね。.....どうしたらいいんだろう。まとめない.....。

日高：こういうタイプのもので、成功した記述ってというのはどういう.....。

島村：たぶんやっぱり、ほんとにね、この、記述が成功してればね、ある種の何かわかんないけど、さっきの「大御所」じゃないけど、「小文字」の持つ突破力みたいなものを発見してね、で、そしたらそれを、そのことをまとめれば良いわけで。

日高：うんうん。

島村：当たり前だけど、論文ってそうじゃないですか。論文のまとめて別に感想書くよりは、そこで発見されたものを、最後にもう一回、指摘しとけばいい。だからそういう意味では、この指摘をもしかしたら、できることがどっかに入ってるかもしれないですけど。

日高：うんうん。

島村：だから、武田さんがこの中から何らかのそのようなものを、もうちょっとくっきりと抽出できてればよかったんだね。で、抽出できてない。時間的なこともあったのかもしれないけど、時間ていうか、データの問題とかもあったかもしれないけど、それができてない時にまとめなきゃいけないっていうと、こういう、まとめになっちゃうと。かなあ、と思いますけど。要するに、中身で勝負したときに、まとめられるものがあれば、当たり前ですけど、まとめになると。そうじゃないときの苦し紛れです。

日高：うんうんうん。



首里森御嶽 (2007.9.3)

滝沢宏美「現代沖縄の米農家事情」

日高：滝沢宏美さんの「現代沖縄の米農家事情」はどうですか。

島村：はい。これはですね、彼女の場合は問題設定がすごい安定していて、そうだ、最初何やろうと思ってたんだっけかな。7月のこの、カードの段階で、米農家の比較で。

日高：最初の4月の段階は何だったかという.....。

島村：昔話・怪談・妖怪・墓だったんだ。

日高：ふんふん。

島村：この次は面白いですね。あの、つまり、最初はやっぱり何か民俗学っぽい、まあ、関心もあったんでしようね。ところが、彼女の場合は、それを自分に引き付けて考えたのはもう明らかですよ。自分の問題、自分の周りとか、自分...の中にあるものっていったらもう、農家なわけですね。で、そこまで決まったらもう、ずーっとそれでいったわけですね。で、それは良かったなあと思うのは、あの一、稲作とか言っても、マユンガナシという来訪神が石垣島に来ます。で、そのマユンガナシが神話を、まさに、生きた神話を語るわけですね。ブツブツブツブツ、おまじないみたいな神話のこぼれ。そこには、石垣島に、っていうか、この世に米が伝えられた経緯を、つまり、稲作の起源神話みたいな。まさにその神話っていうのはそうやって語られてたんだらうなあって。儀礼のときに神が語るこぼれだ。というのが、わかるような。米の起源みたいなのを語った。で、それとかその、沖縄の祭りの中に、稲作儀礼のようなものがあるわけですね。で、そうすると、ようするに、儀礼の世界とか、かつて、米がどのような意味を持ってたかとか。それはまさに、「海上の道」だってそうであって、その、稲を携えて、南方から海上の道伝いにやって来た人たちがいて、日本文化の起源みたいな、柳田國男。で、民俗学で「米」というとそれなんです。で、それは今秋田でやってたそう。

日高：ふんふん。

島村：で、滝沢宏美さんの家で実際に、その、経営していくときに、自分の家、農家を経営していくときに、何を切り捨て、何を選択して、どう運営していくかっていう、そういうものっていうのは、あまり、民俗学は、まあ、今は、ちゃんとした民俗学者はやってるけど。まあ、あんまり、そういうのは、ほとんどやられてこなかった。で、沖縄でもそういう事情がある。が、彼女はそこに着目した。それがすごく面白くて、そんな研究ないんですよ。で、彼女も自分の体験があるから、聞き取ってくる項目みたいなのが、何にもやったことない人だったら、その、インフォーマントを前にして何をどう聞いていいかわかんないし、言われた話も理解できないし、次の質問が出来ないし、相手だって見ますからね。そりゃ学生だろうが何だろうが、知らなかったら知らないなりの対応しか出来ないでしょ。彼女は、知ってるから聞く。そうしたら答える。おそらく話者も面白かったと思う。そしたらそこに調査というものが成立するわけですよ。

日高：そうですね。

島村：それで、しかもその中で出てきたので面白いのが、米と田芋の関係ですよ。田芋が水田で作られている、みたいなのが報告の中でありますけど、あれとの関連。で、田芋も、現在の何か儀礼食とか、あの、私たちが確か、琉球料理を初日とか何日目かに食べたときにも、田芋のなんか天ぷらみたいのが出ましたけど、ああいう形でもやるし、で、それと米の、一種複合みたいなものがあって、それも、その、起源を探るみたいなあれじゃなくて、現在の農家が、その田芋をどうやってつくって売っているか。いわゆる近郊農村の、商品作物なわけですよ。みたいなところをきちっと押さえている、というのは、非常に現代的だし、面白さがある。ただその、それこそあの一、それがなんに繋がるかは、ちょっとわかんないけど。でもきちっと聞いて、あんまり皆がみてないものをきちっと見たっていうのは、意味がある。と、というのが私の感想。

日高：はい。これはほんとに、記述がすごくしっかりしていて、おそらく資料としてですね、後に残るものなんだと思います。数字がいっぱい挙がってますよね。何年に何ヘクタール作付けが、なんていうのがあったりとか、それから例えば表1のような栽培暦なんていうのも、現地で見つけてこれは残しておかなければ、というので、記録しておいたんだと思いますが、そういうのがこう、何を聞き取る、何を記録するっていうのがわかって調査していた、っていう感じがします。

島村：そうですね。そう思います。

日高：で、撮っている写真なんかも、後でレポートを書くときに必要になるものを予想して、工夫した撮り方

をしている。写真3の「タニシとその卵」っていうのも、こう、バックに田んぼの風景があつて。

島村：そう、考えてる。

日高：最終的に何が必要になるかわからない時点でも、ある程度、見直しをもってやってきたんだというのがわかりますね。

島村：そうそうそう。ほんとそう思います。

日高：えーと、田芋に注目するというのは、現地に行っただけでよかったんですって？ あ、カードにもありますね。田んぼで田芋が栽培されていることを知ったって。

島村：ああ、それは準備の段階で、何かで知ったんでしょうね。何で知ったかはここからはわかんない。……まあ、なんかの資料で知ったんでしょうね。まあ、これくらいはインターネットでも出てくるかなあ。

日高：これが重要だっていうのは、どうしてそう思ったんでしょう？

島村：あの、自分のところにはないものだから。まさに、「米農家」の比較で、稲作の比較じゃないところが面白いでしょ？ やっぱりだからそう、このタイトルからして、問題設定がわかる、ていうか、動機がわかるじゃない。米農家の比較なんですよ。稲作の比較じゃなくて。結果的には稲作の比較になるんだけど。出発点は「米農家の比較」。そうすると、自分のうちにはないものを、やっぱり、二期作っていうのはひとつの驚きだし、で、田んぼで田芋っていうのも、秋田ではない。そういうの言っていましたよね。秋田ではないみたいな言い方してたから。

日高：保存が利くものではないので、年中行事から逆算して、植える時期を決めるとか、そういう記述からすごくこう、沖縄の文化的なところの背景が、そういう描き方で見えてきますよね。

島村：ああ……。そうすると、もっと濃いものを求めちゃうんだよなあ。もったいないなあ。だってこれだけだって、もっとガーって書いていったら、ブックレット一冊にはなりますよね。面白い、面白い。……まあ、面白かったということですね。いいのかなあ。あいつ、自分が怒られたことがないって言ったらいいですよ。友達に、「島村先生から怒られたことがない」みたいな。

日高：(笑い)

島村：何かで怒ってやろうかと思うんだけど見つからない。

日高：(笑い)

島村：もう今さら怒れないし。(笑い)ここで怒ったらおかしいでしょ。

日高：(笑い)

島村：んー、日高先生が怒ってください。

日高：(笑い)まあ、ただこれが何に結びつかって

ところを、どれだけ自覚してるのかなあ、というのはありますけどね。

島村：あ、そう。そこは、ちょっと、ないでしょ。ないっていうか、そう、何に結びつくのかって言うは、これだと農協の資料になっちゃうかもしれない。

日高：それに近いものがありますね。

島村：J Aがつくるレポートになっちゃうかもしれない。

日高：そう。つまりさっき、資料としての価値がって言ったのは、この種の情報がほしい人は、もしかすると民俗学ではないかもしれない。

島村：そうそうそう。

日高：(笑い)で、正確な記述があること自体の価値は高いけれども、これからもし彼女が学問分野として民俗学というところを目ざすようであれば、そことの接点というのはどういうふうに、これから、こう、結び付けていくのか。

島村：まあ、あれですよ。その辺の民俗学に結びつくと、良くないので、むしろさっきから何回か出てきますが、「小文字」のね。そっちの迫力で。

日高：彼女の場合、これはね、自然にできちゃってるんですよ。たぶん島村先生の方法論を、自然に身につけちゃったんでしょうね。で、自覚がない分、最終的に意識化してそれができるようになるか、っていうのが。

島村：そうですそうです。そういうこと。それ。だから、そうするとね、せつかく、面白いこの年中行事に今おっしゃったような、時期を工夫していったりするわけですね。しかも腐りやすいという。要するにある自然のものに対する人間の、その、把握が、工夫になっていき、それが市場とも結びつくみたい。で、その部分は、すごい民俗学なんです。私の思う。人々の生きる方法ですから。民俗学って言うのは、で、もしね、本当に自覚しているならばね、そこはやっぱり他よりも、ちょっと自然と量が多くなったり、濃くなったりね、するところじゃないかな。どこを強調するかみたいなどころまで行ったら、それが文章に表れると、むしろもっと良いかもしれない。あの、シンメナービもそういうところあったかもしれないけど、もちろんこれは、高望みしてるわけですけど、全部均等になっちゃうと、「よくできたね」で終わっちゃうわけですよ。過剰性がほしいんですよ。だけど、過剰っていうのも、ピント外れな過剰も困る。そこはだから削られた人たちがいっぱいいるわけでしょ。意味のある過剰がほしいなあ。もしかしたら彼女に過剰さ……。いや、いいんだけど、あの、よくできる子で終わったらつまないよって話なんですよね。



首里城正殿 (2007.9.3)

山田江美「「伝統」沖縄空手の世界」

日高：その点では、山田江美さんの「「伝統」沖縄空手の世界」は、かなり自分なりの捉え方で、この沖縄空手っていうのを分析しようとしてますよね。えっと、図2のような形で。これ、ちょっと複雑な話で、沖縄空手っていうのが「沖縄」独自のものとして自覚されるようになるのがスポーツ空手を逆輸入してからだ、みたいな話ですよ。で、さらにそれが、沖縄空手と名乗りつつ、その中から、また2派に分かれて、一方がスポーツ空手のほうに向かっていく、っていうちょっと複雑なことを描き出そうとしてますけど、どうかこの、分析とまとめ方に関して。

島村：はい。それはですね、沖縄空手の世界についてはですね、すでに当事者による多くの記述が存在する。当事者の人が自伝みたいなの書いてたりとか。でもそれをなぞってもしょうがないと。で、彼女なりに苦労したわけですが、現地では調査から帰ってくるたびに、私と話をする中で、ズレ……。本に出てないこととか、なんか、葛藤とかですね、ズレとか、そういうのがないのか、っていうようなことを言った記憶があって、ま、自分なりにそれを探したんでしょうね。そうすると、色々まあ、裏話みたいなのもあったりして、ちょっとデータが集まってきた。それで最終日ぐらいにある種の、今ここに書かれているストーリーの原形みたいなのを自分でなんとなく、見出したんですよ。つまり、この参考文献みたいなのに出てるマスターナラティブとは別の、そうじゃない語りみたいなのにちゃんと着目できた場合には、まあ、いけると。ただ、これちょっとデータの必ずしも豊富ではないから。この図式が本当なのかどうかっていうのはちょっとまだわからないけど。

日高：今回、直接、新しい情報として得たところだと思うのは、5.2のスポーツ化を取り入れて破門された道場っていうところですよ。

島村：そうです、そうです。その部分。

日高：小さな二極化っていう。で、3つに分裂したっていう話を聞くことができたってあるんですけど、ここ、書くからには、3つとも書いてほしい(笑い)。「スポーツ化に進む人たちと古伝空手を伝承しようとする人たちと、もう一つは噂だそうだがトップの人間関係の対立によって分かれた人たちの3つに分かれた」ってありますけど、書くんだったらもうちょっと正確にその3つ目は、何、どういう派に分かれたのかとかね。

島村：そうですね。多分、ギリギリだったんでしょね。て言うのは、3日間とは言え、彼女が実際の調査ができる時間っていうのは3日間のうちの夕方以降なんです。それはつまり、みんなここに来る人たちは、働いている。で、青年会の場合もそうなんだけど、ちょっと、あの、いわゆる村落でやる場合とちょっと違う面白い現象と言うかですね、那覇とか都市部で調査する場合は、インフォーマントは昼間みんな会社で働いてる。で、帰ってきてから活動する。で、実際、今回、調査の対象となったものもですね、夕方とか夜に活動が行われているものがあつたじゃないですか。青年会もそうだし。この、空手だって、夜みんなが集まって練習してる。だから、そういう意味で、しかもそこで練習に参加しながら、時間をね、いただいて、聞き取りをする、っていうと、かなり限られてくる。その、ある種の焦りみたいなものを、ま、彼女が言っていましたけど。

日高：うんうん。

島村：っていう中でやったので、時間切れみたいなこともあって、今もし沖縄にいたり、近かったら、ま、ここを補うことはま、できたとは思いますが。だからこれでいいってわけじゃないけど。

日高：時間的な制限っていうのは、もちろんあったと思いますけど、それだけじゃなくて、内容がこういう、今現在、確執が残っているような種類のことを、どこまで、こう、調査するかっていうのは、その線の引きってすごく難しいものがありますよね。正確に書けるだけの情報は得ていても、それをあまりあからさまには書けないとか、そういうこともありそうですし、まずは、外から来たばかりの調査者に、そんなに、細かいところまでを、どれくらい語ってくれるものか、というような。

島村：そうですね。そう思います。

日高：今回、テーマによっては、かなり踏み込んだ調査をしなきゃいけないような、そこに自分自身を追い込むということを、やってる人たちはやっていますよね。さっき、武田さんの記述がジャーナリスティックだって言いましたが、でも彼女自身としては本当に、普通だったら踏み込み難いようなところにガンガン踏み込んでいってまして、嵯峨佳菜さんなんか、連日

夜中まで青年会の人たちと一緒にいてっていうのをやっていますし。嵯峨さんの場合は現地に着いた初日に、調査をお願いしている青年会が出演するエイサー大会を見に行こうとしたら、一人では危ないから来るなって言われてたりしましたよね。

島村：しましたね。はい。で、危なくはないだろうとは思いますが、ま、現地の人がそういうふうな電話で言ってくれたと。知り合いが。だからそれ自体その、その部分、現地の人どういうふう意識してるのかなっていう話にもなるんですけど。

日高：去年と今年2回やってみて、特に大きな事故もトラブルもなくやってこられたのは、参加しているメンバーが、どれだけ、集中してやってるかっていうことの証でもあると思うんですけど。一人が集中力を欠いてしまったら全体が壊れてしまうような、そういうすごい緊迫感のある中でやってる。だから、嵯峨さんを送り出すときに私たちが言ったことは、本人がしっかりと自覚していれば大丈夫だと。何をしたいのか何のためにここに来ているのかっていう自覚があれば、危ない目には遭わない。実際そうですね。気を抜いたときに、事故やなんかに遭遇してしまうっていうのは、ま、日常生活でもそうだと思いますけど。だから、そこがすごく緊迫した、集中力が高まった、本当に高まった状態で現地に行って、それぞれが自覚して動いているから、だから、あの、そういう雰囲気作りができていた時点で、私はちゃんと授業として成立していると思いますね。

島村：そうそうそう。あの、マニュアルじゃないんですよ。危機管理をしなきゃいけないから何をすればいけない、じゃなくて、ある種の緊張感とか集中力みたいなものがあれば、何だろう、それが基準なんです。そうそうそう。それが重要なことですよ。

日高：だから、山田さんも、ここまで聞き出すのも、もしかすると、一緒に空手の練習をして終わっちゃったかもしれないところを、3年前に起きたばかりの分裂っていうところの話が聞けたというのは、もうかなり踏み込むことはできてたんでしょうけど。

島村：うんうん。そうですね。

日高：その先どういう記述の仕方をするか、この場合、ちょっと記述としては物足りないように思っちゃいますが、このレポートの段階では、でも、本人がわかったから、こういう図式化ができていたんだろうなっていうところで、想像はできますね。どういうことを聞いてきたのかっていう。

島村：そうですね。3日間でストーリー……。3日間でここまで。さっきの香炉が3つに増えたのを気づくまでに私は2ヶ月半というか3ヶ月かかりましたよ(笑い)。で、山田さんの場合はミーティングとかでも、

分裂とかあるだろう、聞いて来いよ、とまではこちらも言っていないわけだから、やっぱり、あの、入っていったんでしょね。入りこめた。

日高：ただ、記述としてばらついてしまっているのは、着眼点が、今の分裂の部分と、それから海外の空手の話で、ばらついてますよね。

島村：ああ、ほんとですね。

日高：それで、後半の部分で、いったんヨーロッパに伝わったスポーツ空手が、もうヨーロッパでは研究し尽くされて、極められてしまったから、かえてヨーロッパでは古伝空手の方に興味移って、沖縄に学びに来る人たちがいるっていう記述があって、最後のまとめで「今後沖縄でもスポーツ空手の選手が古伝空手の世界へと流れていく」というストーリーを想定しちゃってますけど。

島村：そこは……、やりすぎですね。

日高：前半では、沖縄では今現在、スポーツ空手寄りの方向に分裂が起きているっていう話をしたのにもかかわらず、その、海外の状況を入れたために、今度は、ヨーロッパでそういう流れになっているから、沖縄でもスポーツ空手から古伝空手へっていう話になってしまっている。もうちょっと整理しなきゃいけない。

島村：あのね、やっぱりですね、葛藤とか、対立を、極力避けたいという心性が染み付いているんですよ。日常生活でも、対立しちゃダメだ、ホントは対立してるのわかるけど、必ずこう、調和でまとめたいっていうのがあって、レポートとか、こういう世界でもそうなのちゃうんですよ。で、対立しているものを必ずどちらかに引きずり込まなきゃ、みたい。これはある意味では暴力的な行為かもしれない。暴力的というか何というか。対立しているものを一元化しようとしている。だから本当は、現実を学ぶということ、現実を記述するという事は、そのことを知るということであって、ひょっとしたらそこから、自分の生き方を再考することにもなるかもしれないわけでしょう。なのに、そこに、普段の自分の対立を避けたい生き方を持ちこんでどうすんだよみたいな。やっぱりね、あの、フィールドワークや、記述には、その人の生き方が出ましてくるんですね、と同時に、フィールドワークやあるいは何かを記述するというのが、その人の生き方を再考させる機会にもなるかもしれない。というようなことまで、やっぱりやりたいですね。

日高：そういうところは、だから、今後だと思えますよ。今回、それぞれの素質と言うか、資質の違いがすごく、レポートに表れてますが、どこがどう変わっていくと良いかというのが、人によってほんとに違っていますよね。どうも、山田さんは分析的に事柄の流れを捉えようとするところには、すごく良い資質を持ってい

ると思うんですけど、それに合うような素材にめぐり合えて、その素材が語ってくれるようなデータのとり方ができるようになったら、こういうふうに、まとめるためにまとめるっていうようなことはしなくなってくる。

島村：そうそう、そうなんですよ。



識名霊園の亀甲墓 (2007.9.3)

安部達也「「正座」から見る号令ことばの広がり 授業開始/終了時を中心として」

日高：では、安部達也くんの「「正座」から見る号令ことばの広がり 授業開始/終了時を中心として」に。安部くんの場合は4月の時点では「沖縄の生活文化について何か調査できたら」と書いていて、7月の時点では、「横断幕」なんですよ。彼は前期の授業を受けている間に方言に興味を持ったようなんですけど、で、言語のほうでテーマを探したのがこの「横断幕」だ。「横断幕」はつまらないっていうようなコメントが島村先生からあって、私はなんかまあ、看板とかチラシとか横断幕とかをいろいろ見て回って、言葉に関することだったらなんとかなるかなあとと思ってたんですけど、でも確かに現地調査で人に会わないでどうするっていう。

島村：そうなんですよね。

日高：横断幕文化っていうのが特殊だって思ったみたいですね、最初。

島村：そうでした、思い出しました。『沖縄キーワードコラムブック』¹³というのがあって、他の人もあれを結構見て、生活文化の中でおもしろい現代的なものないかなって、彼はあの中に、あの中に横断幕文化みたいな沖縄には横断幕が多いっていうことを沖縄の若い人たちが自分の文化をそうやっておもしろく、興味深く書くっていうのに反応したんですね。で、なんだろう、これは、別に安部くんが悪いのではなくて、他の

¹³ まぶい組編(1989)『沖縄キーワードコラムブック(辞典版)』沖縄出版

人もそうなんだけど、さっきから言ってる当たり前のことなんですけど、19歳、高校卒業して大学1年生が終わって、大学2年になったばかりのときに、その、ある社会で何を切り取るかっていう調査テーマ、テーマを選ぶこと自体大変なんです。っていうのは、やっぱり今までの高校生とか、まあ、自分の住んでいるところや、本当に狭い範囲でしか世の中というか世界見えてないから、面白いもの探せとか言われて苦労したと思うんですよ。本当に小さな想像力の中で、めいっばい面白いと思ったものがたまたま横断幕だったという、そこをばかにしてはいけないんですけど、で、横断幕だったんだけど、その時点では、で、結果的にはよかったんですけど、すごい面白いから、安部くんの。で、その後どうなったかという、そっから「正座」に至るまでを、ちょっと。

日高：あの一、これはちょっと誘導した部分が実はあるんですけど、小学校の授業を見学させてもらうっていう、これは彼が単独でやる調査ではなくて、オブザーバー参加している高橋貴子さんと持田祐美子さん、大学院生の二人が小学校の授業の談話データを集めているというのがあって、で、それを沖縄の小学校でもやらせてもらおうというのを、一応私たちのほうでは準備していたわけなんです。で、彼が言語でやりたいということを書いてきて、でも、いきなりウチナーグチ（沖縄口）の調査なんて無理なわけですよ、言語調査の訓練を十分に受けてるわけじゃないから。できるとすれば、若い人の言葉だろうと。そこで、今現在、小学校の中で方言がどういうふうに使われているか、実態調査ということで。彼はそれで一生懸命準備を始めて、ここは彼にかなりやってもらった部分ですが、那覇市内でどの小学校で調査をするか、リストアップをして。

島村：やってたやってた、はいはい。

日高：昨年度の調査で首里の小学校では城西小学校と城南小学校に行ってるんですね。で、そこは協力してもらえそうだったので、首里との対比で旧那覇方面の小学校をリストアップして、最終的には泊小学校と天妃小学校をお願いをして見学させてもらうっていう段取りをつけるところまでが事前準備ですね。

島村：はい。

日高：それぞれの小学校の児童数とか沿革とか、その地域の特徴、歴史とか産業とか人口動態とかは事前に調べておいて。それから沖縄にはウチナーヤマトグチという中間方言的なものがあるわけですが、それにはどういう表現があるとか、そういうところは調べていました。で、実際に小学校に行って、録音とらせてもらって、ビデオも撮らせてもらってっていうのをやったわけなんですけど、最終的にこの「正座」っていうの

をテーマにすることを決めたのは、実は秋田に帰ってからですね。

島村：現地のミーティングのときは、出てませんでしたっけ？

日高：初日のミーティングのときに、「今日は何々小学校に行きました」って言って、子どもたちへのインタビューがうまくいかなかったとか、そういう報告をしていたりする中に、授業の始めと終わりに「正座」というふうに声をかけていた、っていうことを言っていました。そのとき私は内心「ほー」って思って。実は私も、初日の授業見学には同行したんですけど、私は気がつかないです。そういうところよりも全体の調査の段取りに気を取られていたんでしょうね。ところが、安部くんはやっぱり、自分の調査だから、見るもの聞くものすべてにアンテナを張っていて、自分にとって「違和感」のあるものには非常に敏感になってるわけですよ。で、1回それが耳に入ると、次の小学校でもやっぱり言ってる、次もそうだっていうので、ミーティングのときにそれを報告の中に織り込むようになって。で、どうもこれは何か彼の心の琴線に触れているようだし、小学校の地域性と方言の使用度というのは、わかりづらいものがある、テーマとして。「正座」っていう具体的な言葉であれば、もっと調べやすいんじゃないかなと。

島村：なるほど、なるほど。

日高：で、帰ってきて、方向転換するタイミングが重要だったんですけど。即変えさせましたけどね。（笑い）

島村：本人はどう……。

日高：本人は「正座」がすごく引っかかっているというのはあるんですけど、今まで準備してきたものとあまりにも違う方向だから、「いいんですか、いいんですか」という感じですね。

島村：いいんですよ、3か月いてもね、最後の15日が変わればいいんですよ。はいはいはい、分りました分りました。で、なんていうかな、むしろ、だからこれはね、民俗学の私の心の琴線に触れるわけはなんでかという、設定した問題が、1個のマテリアルというかトピックできたでしょ。これはどっちかという、なんか民俗学っぽいとかこうシンメナービみたいな感じで捉える。「正座」をめぐるってどうのこうの、何とかをめぐってみたい。で、えーと、フィールドで発見していったのが、まあ、たまってフィールドで転換できる場合もあるし、まあ帰って来てから転換する場合ももちろんあるし、で、その後追加調査みたいな。

日高：そうですね、だから、帰って来てからの調査のほうが、このレポートの中心になっています。現地で調査して直接使うことができたのは、その4つの小学校

で実際にどういう号令が行なわれていたかという、冒頭の事例紹介の部分だけですが、でもこれがあるから、自分が実際に教室で行われていることを見て聞いて録音したものが出発点になってるから、入り口としてはすごく説得力のあるものになってますね。

島村：いいですね、そうですね。

日高：で、やっぱり、那覇の小学校で「正座」と言うことがわかると、それは当然、まずは、あの一、これは方言研究者の性みたいなもので(笑)、どれくらいの範囲でこれが行われているのか知りたい。

島村：知りたい、知りたい。

日高：まずは沖縄県という範囲で、本島のどこまで広がっているのか、宮古や八重山はどうなのか。それから奄美や鹿児島はってということで、沖縄と鹿児島的小学校にアンケート用紙を送って、それに回答してもらって分布を把握するという。

島村：そうでした、そうでした、図2。

日高：これでもう明らかですよ。「正座」を使っているのは、「沖縄県」の範囲なわけです。奄美のほうでは言わない、ということなので、号令の言葉で「正座」という言い方をするのは、沖縄の特徴だと。

島村：あの一、1個だけ……宮古島はなんで言わないんですか？ たまたまですか？ この西辺小学校だけ、たまたまかな。

日高：宮古島はちょっとよくわかりませんが、本島の中で1地点ありますね、19番の中城小学校。ここは「そういう言い方をするのは知っているんだけど、うちはあえて言いません」ということだったと聞いています。

島村：あえて言わないのもおもしろいなー。なんて言ってるんでしょうか？ 那覇の郊外ですけど。

日高：表3-1を見ると、「全学年「姿勢を正しく」と言うことにしている」と回答してますね。「正座」とは言わないけど、「姿勢を正しく」で、「姿勢を正しく」って「正座」を言い換えた言葉なんですね、沖縄では。つまり沖縄の場合の「正座」というのは、「正しく座る」「きちんとした姿勢で座る」という意味で理解されているので、それをかみ砕いた言い方に換えて「姿勢を正しく」と言っているという。

島村：これはつまりあれですよ、「正座」という言葉が本土と違うから本土風の言葉にしなきゃいけないと思ってやっているという意味ではなくて、子供にわかるような言葉に言い換えていると。

日高：そうそうそう。

島村：あー、分かりました。あー、そういう意味ですね。

宮古もそう、こう書いてますね、「よい姿勢」。あー、そういう意味ですね。1年生、6年生も同じですか？ 19番。

日高：19番は同じですね。そうそうそう、宮古の小学校

は、1年生の回答しか戻ってこなくて、6年生の回答がわからないので、もしかすると、1年生だけが「よい姿勢」というかみ砕いた言い方をしている可能性もありますね。

島村：1年生だけじゃなく6年生でも言わないというのは、「正座」という表現に相当違和感を感じてるんですかね。この19番は。

日高：いやー、この学校の場合は、特別に方針があつてのことじゃないですかねえ。沖縄の中では、ほとんど気づかれないうちに使われているようですけど。あのこれ、アンケート調査だけでなく、何校かの先生には電話で直接インタビューをしてるんですが、「えっ、本土では言わないんですか？」っていうような反応が多いと。

島村：おもしろい。これなんか沖縄の新聞に載りそうですね。このトピックだけでも。

日高：気づかれないうちに、いろんな広がり方をしているんだと思いますよ、これは。今回は小学校だけを対象に調査してますけど、小学校で得た知識が、地域に広がっていくことってあるじゃないですか。実は私は自分の調査で首里の50代後半の方にいろいろとお話を伺っているんですけど、今回、調査の合間に「正座」について聞いてみたら、家の中でも使うって。自分が子どものときも、お客さんが来たら母親から「ちゃんと正座しなさい」と言われたっていうんです。それはいわゆる足を折り曲げて座るという意味ではなくて、姿勢を正してきちんと座りなさいっていう意味合いで「正座しなさい」と言われたっていうんですね。

島村：なるほど、なるほど。

日高：ただ、この「正座」の由来については、今回の調査の範囲ではまだ分らないんですね。軍隊教育とのつながりみたいなところを入れてはいるんですけど、「起立」「気をつけ」なんていう一般的な号令が軍隊に由来するらしい、ということまではわかって、じゃあ、沖縄の「正座」が沖縄の軍隊に由来するののかどうかというと、そういうところまでは追究していないんで。今後は、その可能性も含めて、幅広く調べてほしいですね。

島村：なるほどー。あの一、彼は本当、発見できてよかったですね。で、やっぱりおもしろさは、おもしろさはというかね、これも民俗誌、ある種の民俗誌っぽいところがありますね。さっき、一つの言葉とか一つのものとかから展開できるって言ったけど、これ、「小文字」なんですよ。「正座」というのは、これ「小文字」で、さっき言ったようにそういう意味では今回のこの報告書を貫通しているのは、「小文字」のエスノグラフィーだということでは？ まあ、エスノグラフィーって「小文字」ですけど、大概。「正座」などは一つのい

い例として「小文字」で、「小文字」から出発して大きなストーリーが出てくるわけですね。そういう話なんです、小文字から行くのは、で、それがうまくいくのが民俗学で、その一種のなんですか、ポトムアップというか、「小文字」から出ていくというですね、そういうことなんですね、はい。



城南小学校にて (2007.9.4)

柴田真希「ラジオ沖縄「方言ニュース」から見る沖縄方言」

日高：で、最後に残ったのが柴田真希さんの「ラジオ沖縄「方言ニュース」から見る沖縄方言」ですが、これは、先生、読んでみてどうでした？

島村：……今ちょっと言葉につまりましたが（笑い）

日高：（笑い）えーと、これは、前半のところは、「方言ニュース」の沿革を調べてみたら、何か、まあ、つじつまの合わないことが出てきて、で、それをちゃんと解釈しようっていうのが前半の部分ですね。

島村：あー、ずれがどうだこうだ言っていましたね。

日高：後半の部分は「方言ニュース」で使われている方言がどんな特徴をもつのかっていう、かなりこう性質の違うものを二つ並べてるんですけど。

島村：はい。

日高：彼女が現地での調査で、一番大変だった、というか頑張ったのは、調査最終日に沖縄県立図書館で缶詰状態に。みんなはもうフィールドワークで歩き回っているっていうときに、図書館にこもったわけですね。で、彼女が探していたのは、1960年あたりに起きたっていう「方言ニュース」をめぐる新聞紙上の論争と、「方言ニュース」の休止期間がわかる資料。それでひたすら、新聞のマイクロフィルムをクルクルと一日中、記事を探して。

島村：探して……。

日高：「方言ニュース」の沿革に関する資料はいくつかあるんですけど、それによると、「方言ニュース」は1960年に始まって、5年程度の休止期間があり、再開してからは現在に至るまで続いている、ということになっ

ています。で、その休止期間が文献の中で、あるいは直接インタビューした人の記憶の中でずれていると。これ、やってみてわかったことなんですけど、ラジオ局っていえば、その局の沿革についてこと細かく、各番組がいつからいつまで放送されていたかなんてというのは、当然記録されていると思うじゃないですか、それがないんですね。

島村：おもしろいなー、それおもしろい。流れてっちゃうんだ。

日高：そうそうそう。もう、関係者で記憶している人がいればわかるっていう。

島村：これは、なんですか、本土のNHKとかそうじゃないんじゃないですか。

日高：どうなんでしょうね。

島村：あー、これおもしろいかもしれない。メディアの問題として、私たちは何ですかね、ものが蓄積されていくと思うし、新聞だってそうですよね。それこそさっきの彼女の調査の、マイクロフィルムになっていく。ものが蓄積されていくのは文字でしょう。……電波って何なんだ？蓄積しないのか？

日高：そうそうそう。

島村：ほー、これおもしろい。へー、これが沖縄的なのかどうかっていうのもちょっとおもしろいし、なんか、韓国なんかもたぶんそうなんですよ。今でもそうだけ。っていうのはね、あれかもしんないなー、つまりね、作るときだって結構自転車操業で作ってるじゃないですか。作って流してそのままみたいなの、かなー。

日高：そうそうそう。で、詳しくは、本文を読んでもらうとして、結論としては、「2.2 方言ニュースの沿革」の最後のところ、「方言ニュース」は、1960年9月の放送開始から4年後の1964年9月にラジオ欄から番組名が消え、1968年に休止されたのにもかかわらず、1973年に復活し、1974年にはラジオ欄にも記載されるようになって今日に至る」っていうことですね。この流れをつかむまでが大変時間をとって作業したところです。で、今度はこの流れってなんなんだろうっていう話になるわけですね。で、もう一つ、探していたのが、1960年の「方言ニュース」開始当初に、「方言ニュース」をめぐる論争が新聞紙上で起きたっていう。ある資料に書いてあるんですが、論争が起きたっていう記述があるだけで、具体的にどんな論争だったかが書いてなくて、新聞の日付なんかもわからない。それで彼女は丸1日をかけて、ひたすらもう、マイクロフィルムを見てですね、で、見つけた新聞記事というのが、この資料とですね。1960年12月28日の記事と翌年の1月10日と11日。

島村：ちなみに1960年の1月1日から調べたんですけど、彼女は、

日高：あ、えーと、これ9月から番組が始まっているから、そこからですね。

島村：あー、でもずーっと探し続けて。

日高：そうそう。だから、もう最終日の打ち上げに間に合わない、遅れてきましたよね。図書館開いてるぎりぎりまでずーっと見ていて、時間ぎりぎりで見つけたから。

島村：そうでしたそうでした。

日高：で、これすごく貴重な記事だと思うのは、神戸大学から琉球大学に招聘されてきていた嘉納っていう教授が、この人はどうも経済学が専門みたいですが、で、その教授の「沖縄を見つめる」というエッセイみたいな文章に「沖縄の方言」というのが取り上げられているわけです。「方言ニュース」について述べているのは一番最後のところで、柴田さんも本文中で引用してますけど、「方言のニュース放送はまことに珍風景」というね、「普通語を理解できない老人は、おそらく小学校もロクに出ていないであろう。その人々に、方言のニュースを聞かせても、おそらくその内容の理解は困難であろう」なんて、まあ、今から見たらなんてことを言うんだっていうような言説になってますけども、でもこの前の部分から見っていくと、これはこの時期、1960年代、これは沖縄に限らず、沖縄はもっとも顕著だったと思いますが、方言の位置づけに関するこれはかなり一般的な見方ではあったはずのものです。前のほうで、「一般に、言葉や文字は、文化の発達に影響するものである。沖縄の子どもにとっては、普通語¹⁴をおぼえるうえに、方言までもおぼえねばならないとしたら負担の過重である」と言ってますね。日本国の国語政策では、当用漢字を定めて漢字の使用制限をしたりして、教育の中でそういうところを整備して子どもたちの負担にならないようにってことをやっているのに、沖縄では方言と共通語の両方が並存する社会を「助長」するような……。

島村：助長（笑い）

日高：それにメディアが加担するのは何事か、そういう言説なんですね。で、さらにその後で、本土から来た学者が、殊に言語学者の中に、純粋な沖縄の人々をおだてて、沖縄の方言を残しておくよう主張するものがある、と。そんなふうに、実験材料としてモルモットにされたらたまったもんじゃないうって書いてますけど、これも沖縄の中には根強くある論争です。1940年にも柳宗悦、日本民芸協会の人たちが、当時の沖縄の行きすぎた標準語励行運動を批判して方言の保護を訴えたところ、沖縄県学務部から現在の教育委員会みたいな部署ですが大反発を受けるわけです。そこで

は、沖縄の文化発展のためには標準語を普及させる必要があるんだ、というような主張がなされて、これは当時の沖縄社会では切実な問題だったわけですね。それを繰り返しているわけです、1960年代に。方言撲滅・標準語励行、それによって中央文化を普及させようというような発想、もっと合理的、効率的な社会にしようという発想が、まあ、経済学者らしいなと思いますけど。そういう発想があったわけです。

島村：ふむふむ。

日高：で、この嘉納教授の記事に対するラジオ沖縄の反論が、いろんな意味でおもしろいなと思うんですけど。資料ですが、これ全文を読むとすごく真つ当なことを言ってますけど、まずは、この設楽敏雄ラジオ沖縄編成部長という人の、方言に対する現状把握ですね。「真にこの方言ニュースを必要とする人々は、私見では、30%内外と推計される」と言ってますね。この数字がどれくらい信憑性があるかはさておき、1960年時点で30%くらいの方が方言のみで生活しているというふうにラジオ局が把握していたっていうこと。「方言ニュース」は、その人たちを言語的なマイノリティにしないために放送している番組であって、それもせいぜい5年でこの番組は必要なくなるはずだというふうに言っている。

島村：5年かあ。

日高：で、本当に反論になっているのは翌日の記事のほうで、「言葉についてかくあるべきであるとかあってはならないとかいうことをきくとき、私はそこにファシズムの匂いを感じる。古来、言語政策が性急にとりあげられるのは、必ず権力者の、為政者の御都合主義である」なんていうのは、沖縄のこれまでの歴史を踏まえた発言になっていますよね。それから嘉納教授は沖縄の古典演劇や民謡を除いては沖縄の文化発達のために方言を追放すべきだなんて言ってますが、「方言は死ぬ、古典や古謡は残れ」という風にきこえてそれでは虫がよすぎる」というように、これは反論として成り立つことを言ってますけど。

島村：なるほど。と言いながら、やっぱり5年で消えちゃうだろうというところが、ある種リアリズムなのかもしれないけど、ちょっと不思議。それだけなんか現実があったんでしょね。

日高：1960年の放送開始当初は方言っていうのはいづれなくなるもので、今は過渡的な時期で必要な人がいるから放送してますっていうスタンスで、実際に1968年にいったん休止してしまうわけですよ。で、1960年代って言えば、沖縄では本土復帰運動が隆盛を極めている時期じゃないですか。当然、本土に同化しようという意識が強まって、ウチナーグチではなくヤマトウグチを、ということになりますよね。実際には方言

¹⁴ 共通語のこと。

がなくなったからではなく、方言が社会的に価値を失ったから、「方言ニュース」は、いったん休止してしまう。その時点ではスポンサーがつかなかったからってというのが、インタビューのほうで出てきてますよね。

島村：うんうんうん。

日高：それが復活するのが1973年だっていうのがミソで。

島村：そうですね、本土復帰の翌年。

日高：そうそう、翌年だっていう。だから「方言ニュース」の沿革をたどってわかったことは、「方言ニュース」の存在意義が、1960年代の放送開始当初と1970年代の復活して以降では、意味が全然違っているんだと。方言だけで生活している人のためってところから、なにかこう、本土復帰を果たしたもののこれから沖縄どこへ行くみたいなの、まあ、アイデンティティの問題とかそういうものが立ち現われたところで、言葉をその象徴として掘り起こしたっていう……。

島村：はいはい、いやー、うまく出ましたよね。やっぱり頑張ったんだな、彼女も。あの一、これは全然知られてないことなんですよね、この話は。

日高：はい。こういう形で時系列的に資料をそろえたものはないと思います。

島村：すごいじゃないですか。これは、しかもこの資料、嘉納って人の。これもマイクロフィルムの中に埋没している資料なんですよね。

日高：そうそう、これだけでもちゃんとこう当時の記事などを再構成することで読み取っているんで、これだけでも十分成功だったなって思いますけど。で、もう一つ彼女がやったことってというのが、現キャスターの伊狩典子さんと小那覇全人さんにインタビューをして、で、その中で同じ新聞記事、まあ同じニュースの記事をそれぞれにその場で方言に翻訳してもらって、その言語的分析というのをやっているんですね。で、これは、謝辞のところにも書いてありますけど、この資料と文字化はですね、これは彼女一人に出来るものではありません。音声ってというのは、聞いたままをそのまま文字にできるって思うってしまうかもしれませんが、ある言語の中でどの音が意味の区別に有効であるかっていう、音韻体系についての理解がないと、こういう文字化はできないんですね。この部分は完全に現地の研究者の方の協力を得ています。『沖縄語の入門』¹⁵という非常によいテキストが出ていますが、その著者の西岡敏さんと仲原穰さん。お二人とは、今回、島村先生にも同席してもらって「懇親会」を。

島村：超盛り上がりました（笑い）

日高：（笑い）で、文字化資料はこのお二人に協力してもらってこの形になってます。もちろん分析に関しては本人がやっていますが、この文字化資料に関しては、そういう支援があってできあがっています。

島村：はいはい。逆に言うとそれで資料のなんていうか、資料として使えるものになっていると。

日高：そうですね。で、この性格の違う二つの話をどうつなぐかということですが。

島村：はあー、なんていうか、結びつけなくても、なんか、今、本人のこのまとめ見てるけど、まあ、そうかもしれないけど、……いやいやこれはもういいですよ、今回はこうね、彼女こう書いてるけど。

日高：二つの話ができあがってからも、「おわりに」が書けないって困ってました。

島村：例えば私だったら、「以上この沖縄の50年の間に起こった方言ニュースをめぐる二つの問題について明らかにした」（笑い）これで終わるでしょ。

日高：（笑い）

島村：二つの関係性は、それがあればエクセレントだとは思いますが。わかんないけど。っていうか、あの、彼女苦労したかもしれないけど、私にとっては別に終わりに、これなんかわかったようなわかんないような（笑い）終わりじゃないのかなと思いますけど。で、結局ほら、なんだ、「方言ニュース」が今後も存続し得るかどうかは方言を後世に伝えていこうという思い次第で、っていうか。……その誰の思いなのよっていうのがあるし、スポンサーみたいなね、のが影響するかもしれないし。まあ、つまり逆な意味ですよ、金になるとしたらがangan「方言ニュース」やろうよみたいな話になるかもしれないし。だから、さっきから言ってるけど、何でまとめようとするんだらう。

日高：私たちがストーリー、ストーリーって言うから……。今回のレポートの中では素材から自然に流れができていてものと、なんとかこうオチをつけようとしているものっていうのが。

島村：あるんですよ。……まあ、なんだろうな……その辺の話、合宿のときはさすがにここの部分のまとめをどうするかみたいな、そこまではやってないまま来たので、まあ、しょうがないかなみたいな。

日高：どうまとめるかはともかく、彼女のもしかしたら一番の出発点にあるかもしれないのは、さっきも出てきた前期の授業の「総合ゼミ」で柴田さんも秋田国体を調べていて、で、彼女は出身は横手ですけど、同じ県南の羽後町を調査したりしていくうちに、自分が知らなかったような、地域の人たちがいるんな、こう、問題を抱えていたり、いわゆる地域活性化のためにいろんな取り組みが行われていたり、というのを調べたわけですよ。で、選んだテーマはそれにつながる話な

¹⁵ 西岡敏・仲原穰（2000）『沖縄語の入門』白水社。

んですね、この「方言ニュース」っていうのは、方言を通じた地域アイデンティティの問題だから。今はまだ結びついていないのかもしれませんが、自分のやっていることのつながりというものが見えてくると、遠く離れた秋田と沖縄のことというのではなくて、

島村：そうそう、地続きの問題なんですよ。最近流行りの、人類学では流行りの言葉ですが、地続きの問題。自分とインドの人は離れてるんじゃない、それは要請があるんでしょね、恐らく人類学の。つまりオリエンタリズムじゃないって言うためには地続きだっていう、なんかありまして、まあいいんだけど。それはいい面もありましてですね。その彼女にとっては、滝沢さんにとっても地続きだったし、この柴田さんにとっても、ある種そういうところに行くんだと思う。で、それも、まあ、なんというか、京都から見れば二つの周辺地域なわけですよ、沖縄と東北という。で、ちょっと同じような問題を抱えている。



調査最終日の打ち上げ (2007.9.6)

授業の出発点と到達点

日高：そもそもなぜ沖縄なのか、秋田の大学がなぜ沖縄でフィールドワークなのかっていうのはあるじゃないですか。(笑い)

島村：はいはい、ありますね。

日高：その出発点が、今の3年生の人たちが1年生のときに受けた「初年次ゼミ」で、えーと、2005年度の「初年次ゼミ」。この1年生向けの授業で、当時の日本・アジア文化選修の2年生、だから今の4年生ですよ、そのうちの数名に「上級生による模範発表」みたいな形で「琉球と沖縄」という発表をしてもらったんですよ。ちょうどそのころ『琉球新報』を私が購読していて、その新聞の下の欄の広告で「琉球」という名称と「沖縄」という名称がそれぞれどんな商品に使われているかを分類して考察するっていうのをやって。で、その時に、勢いで「来年は沖縄に行くぞー」みたいな感じになって。

島村：あーそうでしたね。そうさそうさそうさ、そうそ

う。で、それはそういう経緯がありつつ。

日高：私自身は方言の研究をしていますけども、今は拠点になっている東北方言の研究が主にはなっていますが、出発点は対照研究なんですよ。全国各地を歩き回ってっていうのをやっているの、その点で「いずれは沖縄に」というのがあったわけですよ。その「いずれは」というのと、ちょうど島村先生が卒論で沖縄をやっていたという背景がうまくかみ合ったわけですよ。

島村：そうです、そうです。

日高：これを授業で展開するという点に関しては、いくら「装置」が必要だったと思いますけど。現地に連れて行ってただ突っ込めばいいっていうのではなくて、調査テーマの設定の仕方とか、事前の学習会などを進めていくにあたって、本気で取り組ませるための仕組みとか、装置作りみたいなものが。

島村：そうでした。最初は民俗と言語に分けるといって、一応分ける、今も一応そう、まああんまり。

日高：今年のはあんまり分かれてる感じじゃなかったですよ。

島村：始める前のシラバス作る時には、まあ、私としましてはですね、まあ巡見かなぐらいに思ってたんですが、どんどんどんどん要求するものが高くなっていった。で、それはいいことだったと思いますね。巡見だけよりはよかったです。それはだから、教員がですね、一名でやるよりも二名でやるということの意味ってのはそれで、まあこんな程度だと思っても、片方がちょっとそれよりもやるようなことを言ってくると、じゃあもうちょっとやるかってなって。

日高：(笑い)

島村：こう、高くなると。というのもいいし、あとはなんですかね、そう一人でやっているとやっぱりね、枠がどうしても狭くなるんでしょうね。私がやったらもっと小さ……なんだろう、例えば、もし私が民俗のほうやってて、一人でこう沖縄でやってたとすると、今言ったみたいに巡見に止まったかもしれないし、そうじゃないにしても、なんだろうな……ここまで多彩に……っていうか、それはね、内容の、一人でやったからその内容になっちゃうんじゃない、まあ、これは身も蓋もない話ですが、エネルギーがね、やっぱり一人でやったらちょっとここまでできないですよ。だからそれが教員が二名いると、許容量が増えるじゃないですか。という面では二名でやるのはいいことだし、そうですね。あとはなんだろうな、やっぱり学生から見ても一人の先生が言ってるだけ、私の言ってることは本当は信用されないはずなんだけど、向こうも見てると思いますよ。こんなこと言ってるけど、基準はどのくらいかとか、基準なんかはもともと存在しないんだ

けど、ここまで言ってるけど、こっちの先生も言うんならまあこんなもんなのかなと、信憑性が増す。

日高：うんうんうん。

島村：で、ある時期から私たちはその信憑性が増すことが直感的にわかったので、それを利用してた面はありますよね。(笑い)

日高：はいはいはい、それは完全にそうですよ。1年目は私も言語の範囲でっていうふうに思っていたから自制してる部分、というより、まあ、よくわかんないっていうのがあったんですよ。沖縄のこともわからないし、民俗学のこともわからないっていう。これは1年目の現地調査の打ち上げでも言いましたが、私自身がすごく学ぶものが多かったと。で、それは大学教育の醍醐味だと思いますけど、通信教育とかテレビでは絶対に得られないもので、その専門家の「呼吸法」を学ぶみたいな。同じ空気を吸いながら、ものの見方、何をどんな見方で見るのかというのを、直接観察して自分で再現してみても体得するという。それは一緒に歩き回らないと、あるいは一緒に学生を指導してないときできなかったこと。だから、2年目の今年は、私は完全に「島村モード」に切り替えるということができるよう。(笑い)

島村：怒ってましたね、途中で。怖かった。ためしに私が怒ってみたら、それを引き継いで(笑い)そうそうそうそう。

日高：あの緊張感を維持するためには、その場の空気にとどっぷり入り込めるように、私自身が切り替えられるようにならないといけないっていう、というよりも、切り替えたほうがうまくいくということがわかったからで、それが、教育的な意味合いでの2年目の成果でもありますけども、研究者としても、言語学的な志向性と民俗学的な志向性の違いというのを、本や論文を読んだりとかそういうのではなかなか実感できないものがわかってきたというのがあります。それは恐らく学生たちも見ていて感じていたと思いますが、どんなに私が「島村モード」に切り替えたところで、やっぱり私のほうの言語学者の性っていうのは(笑い)そぎ落とせないものがありますよ。要素を体系に位置づけたいとか、数値化して傾向をつかみたいとか。

島村：そうですか(笑い)

日高：このあいだも、島村先生と話していて面白かったのは、先生の博士論文の草稿を見せてもらったんですけど、その中の写真のキャプションで、「何々の様子」とか「何々のあった場所」とかの中に、「何々している」というのがあって、私なんか、名詞の表現にそろえればいいのにな、って思ったんですけど、「これは動詞じゃないと表現できないんです！」って(笑い)

島村：そうそうそう。

日高：「名詞にはできない」って言ってましたよね。あれはすごく面白いなと思いました。言語学の場合だと、こう、静態を記述するっていう、体系を記述するっていう感覚があるから、対象を動かないものとして捕まえようとするわけですよ。それを動くものは動くままに記述しようっていうのは、すごく面白いなと思いましたね。

島村：矛盾してるんですけどね。まあ、それはね。その議論入ってっちゃうと、矛盾の議論入ってっちゃうと、もう、面白くない話になっちゃうんだけど、つまり動くものを書けるのかという話になっちゃうから、でもそこはちょっと目をつむって、まあ、ピンセットで標本作ろうとしても、こうバタバタ蝉が動いてるんだったら動いてるのかなーと思いましたけど、はい。

日高：で、とにかく、学生には、島村先生は「デジカメ持って行け、写真とれ」でしたよね。私は「録音機持って行け、音声とれ」ですからね(笑い)

島村：分りますよ、はい(笑い)そう、そうなんですよ。

日高：そういう、データの取り方とか、何に着目するかっていうのに、共通する部分もあるけど、異なる部分もあって、学生たちは、それを見ながら、自分が対象にしているものに、どういうアプローチの仕方を取り組むのが、その素材を一番活かすことになるのかということ、取捨選択できるような環境が、もし作っていたとすると、それはすごく、一緒にやってきたことの意義だと思いますね。

島村：そうですね、はい。そう思います。で、あの、こうなんていうか、一般論的に言うと、教室あげての実習みたいなのをするとところがよくありますよ。例えば筑波大学なんかでも、民俗学専攻の教員4~5名でなっていて、それともちょっと違う、全然違うんですよ。あれはどうでしたか。大阪大学で方言調査とかするとき、先生は何人。

日高：うちの場合は一緒っていうのはあんまりなかったんですけど、私がいた頃は、中心になる先生は一人のことが多かったです。外部の研究者の方が同行したりというような形はありましたが。

島村：なるほど、はいはいはい。で、うまくいく人数とね、人数とか分野の組み合わせとかね、あるいはパーソナリティの組み合わせとかもあると思いますけど、それがこう集団指導体制をとればいいのかという、そういう問題でもない。1人でもだめだし、それが4人になってもだめだし、2人でも組み合わせによっては全然意味がなくなっちゃう場合もあるところが多いと思いますね。だから……例えばこれを4人でガーッとやっても小さな4つの調査ができちゃうかもしれないし。

日高：その危険性は高かったでしょうね。幸か不幸か1年目も2年目も言語の人が少なすぎたので、私が民俗のほうでも発言せざるをえなくて。

島村：そっから、すごいことになっちゃったんですね。

日高：これが半々だったら、パカって2つに分かれてたかもしれないですね。

島村：これはそう、日高先生が民俗学者になっちゃったっていうね。

日高：(笑い)

島村：これほんとに、素晴らしいことですよ。ほとんどこのレポート、手を入れたのも、コメントしたのもほとんど日高先生ですからね。

日高：いえいえ、だからまあ、島村先生には、中身をこうやって今日は解説してもらって、それぞれのレポートの意義と課題っていうのを、大いに語ってもらったので非常に有意義だったと思います。



研究成果発表会会場：森林学習館にて (2007.12.23)

報告書の構成

島村：で、この並び順ですが、今言ってきた並び順でいくのか、今しゃべったのでいくとどうなったんでしたっけ、ちょっと。最初に何から見たんだっけ。

日高：えーと、遠藤さんからですね。でもまあ、つながりってことだと、まずは、信仰と伝承関係で「ユタ」と「神話」と「キジムナー」と「マダン橋」は一つのまとまりに。

島村：「マダン橋」先のほうが迫力ありますね。で、これに、のるって感じで「キジムナー」。だからその、戸田さんが枠組み作った上に保坂さんのものつけてみたっていうね、それがいいかなと。

日高：それから取り組み方っていうので似てるのは「シンメナービ」と「ウチナー弁当」。

島村：これも「シンメナービ」の枠組みに「ウチナー弁当」のつけたほうが。枠組み的に理解しやすいのはやっぱり「シンメナービ」なんで、「シンメナービ」にのつけて次に「ウチナー弁当」と。それで。

日高：それからつながりがあるってことだと、「模合」と

「青年会」。

島村：これはもうそうですね。

日高：これはどっちが先ですか？

島村：えーと、あのね、あのね、あのですね、さっきと反対にすると「青年会」のフィールドみたいなのが「模合」につながってって言い方もできるわけですね。さっき「模合」と「青年会」の場が同じみたいなこと。で、なんですかね、そうねー、これはどちらも社会組織なんですけど、社会組織の大きさから言うと青年会のほうが日常性の組織でしょ。模合ってのは月一回だけだから。とかなんかこう、記述の充実度から、なんかこう、なんだろう……今回の場合の「模合」……わかんないけど、各論なんですよ、「模合」のほうで、「青年会」のほうで総論っぽい感じがするでしょ。

日高：うんうんうん。

島村：私の意見では「青年会」があって「模合」かなみたいな。うーん、ちょっとそれでペンディングと。それで。

日高：つながりっていうと、うーん、地域を転々としながらということ、「米農家」が北から南下して、「コザ」で、「糸満」っていう、ただまあちょっと手法が違う感じなので、これが並ぶのはどうなのでしょう。

島村：うんうんうん。えーと、あと残ってるのが、「空手」と「方言ニュース」と「正座」でしょ。えーとですね、……なんか「空手」の年代とね、ああ、まあ、年代というか、なんだろうな、伝統文化みたいな感じでいくとね、「方言ニュース」のほうにつながっていくみたいなね。

日高：うんうんうん。

島村：なんかこう、なんかちょっと沖縄のアイデンティティみたいな話、「方言ニュース」の前に置いてみたいんですね。

日高：うんうんうん。

島村：それで、「正座」はまあ、方言並びでいくと、現在を観察するというか発見だから、最後のほうにくると、仮にそうだとしますと、えーと、えーと、えーと、「米農家」と「コザ」は、「コザ」は、えーとね、「コザ」っていうと、わかんないけど、「米農家」を……確かにね、そうなんですよ。転々として感じていくと。「コザ」がきて「米農家」やると、「米農家」薄まる。なんか、インパクトが。ほんとに「米農家」充実してるんだけど。そうすると、「米農家」のあとに「コザ」にするでしょ、例えば。で、「糸満」をどうしてあげるかなんだけど、これをね、一番最後で写真集っていうのはあまりにもかわいそうですよ。で、これ宗教っぽいこと出てくるでしょ、墓とか。

日高：うーん、そうですね。

島村：そうそう、そうするとですね、例えばですね……
ほら、「キジムナー」の調査で保坂さんが糸満に行っ
てるんですよ。

日高：あーそうですね、そうでした。

島村：ほら、きたよ、「糸満」いいじゃん、いい、ほら
ほら。「キジムナー」のあとに「糸満」で、「糸満」行
ったらですね、さあ、どうしようかな。「米」がどっか
ら来るかという、食べ物できたな。「ウチナー弁当」
食べたあとに、「米」前でもいいけど、どうだろう。
どうですか。「米農家事情」、待って、「田芋」か。「田
芋」、「シンメナービ」っていうのはありうるんです
かね。

日高：うんうんうん。

島村：たぶんシンメナービは田芋なんかも煮たかもし
れない。あー、わかんないけど。

日高：(笑い)

島村：で、「ウチナー弁当」。試しに仮説としてですね。
「米農家」「シンメナービ」「ウチナー弁当」といっ
て、弁当だかなんだかわかんないけど、なんでもあり
になってきたなー、よし、「コザ」！みたいな。

日高：おー(笑い)

島村：(笑い) 例えばですよ。

日高：ふんふんふんふんふん。

島村：それで、「青年会」と「模合」。っていうかね、っ
ていうかですね、何が一番最初に来るべきものなのか
って、それなんですよ。

日高：そうそうそうそう。一番最初は大切ですよ。出発
点でまずはこれから読んでもらいたいっていうのはど
れなんだろうな。「青年会」はどうですか。

島村：……私も今ちょっとそう思ってたんです。社会の、
そう、社会構造みたいな話でしょ。「青年会」やって、
まあ沖縄にはそういう「模合」っていう社会があると。
どちらもこう、「沖縄社会」とくる。あ、そうなんだ。
「青年会から見る沖縄社会」と、「模合から見る沖縄社
会」。

日高：今回ね、それが多いいんです。何々から見る沖縄何
とかっていうのが。「方言ニュース」もそうですし。

島村：あー、ほんとだ。ほんとですね。で、「青年会」「模
合」とくると、人の集まりなので、これは「ユタ」で
しょ、ていうか寺。それに、「神話」で伝承論が来まし
て、「マダン橋」に「キジムナー」で、まあ、そういう
その手のいろんな可能性を秘めた「糸満」がくる、「糸
満」終わったあとに……。

日高：「米農家」。

島村：うん、「米」、やっぱり「米」に行く、遡るんでし
ょうね、地域的にもね、ばーんと上に行って、「米」
で、「シンメナービ」、「ウチナー弁当」って、だか
らやっぱり……鍋の前にやっぱり鍋で料理する米かな

ーみたいな。この場合はですね。それで「弁当」きた
らやっぱりわかんないけど、「コザ」とか。

日高：(笑い)

島村：で、「コザ」きたらもうあれでしょ。なんかわかん
ないけど、「空手」で、「空手」でしょ。「空手」の時代
でなんかものが変動したり葛藤したりする。葛藤とか
価値の違うものとかあるということで、「方言ニュー
ス」があって最後に「正座」で締めるみたいな。

日高：ぴったり7、7で分かれましたね。

島村：おっ、そうですね。

日高：はいはい。「青年会」「模合」「ユタ」「神話」「マダ
ン橋」「キジムナー」「糸満」のグループと「米農家」
「シンメナービ」「ウチナー弁当」「コザ」「空手」「方
言ニュース」「正座」のグループ。じゃあ、それぞれど
ういうタイトルを立てていきますか。

島村：はいはいはい。えっ、「米農家」から始まるんでし
たっけ。

日高：はいはい。2部構成の第2部ですね。

島村：あーあーあー。ちょっと待ってください。

日高：昨年度の報告書は、「1. 沖縄文化の伝統と創造」
「2. 沖縄の生活文化と都市民俗」3. 沖縄のこぼ
れと社会」のいう3部構成でした。この部立てのタイト
ルを考えると。

島村：はいはい。伝統と創造、社会……社会のまま独立
させると細分化しちゃうから、やっぱり2部構成って
ことですね。

日高：そうですね。

島村：はいはい。

日高：第1部は、これは共同体っていうのと、この伝承
っていうのが。

島村：そう……社会と伝承。社会、社会……社会……な
んかこう、社会があって、信じるものみたいなのがあ
って、伝承があるんですよ。

日高：うんうんうん。

島村：で、社会とね、伝承の間のなんかが。

日高：信仰。

島村：そうそう、信仰。でも信仰って言っちゃうとなん
かベタなんですよ。

日高：うんうんうん。

島村：……最後はやっぱり伝承にしてあげたいですね。

日高：伝承ですね。

島村：……神って言っちゃうとちょっとまたね、違う…
…神なんだけ。

日高：うん。

島村：でも、しゃ……社会と伝……社会、社会と伝承、
沖縄と社会、みんな沖縄ってことは入れてるんですよ。
「沖縄社会と伝承」はちょっと寂しいなーっていう
か、うーん、「沖縄社会と伝承」……まあ、でもとりあ

えず「沖縄社会と伝承」に仮にします。もっといい言葉思いつくかも。で、次のほう考えるとするかな。「米」から、食文化、女性……「伝統と現在」なんですよ。

日高：うんうんうん。

島村：あの、ほら「伝統と現在」でもね、「伝統と現在」って時間のあれでしょ。で、こっちの第1部のほうは……あのー、こっちはね、「伝統」じゃなくて、「伝承」なんですよ。

日高：うんうんうんうん。

島村：こうなんか、すごい……見る人が見れば工夫してるなって思ってくれるかもしれないけど。で、あ？「伝統と現在」「現代」？「現在」？「伝統と現在」のほうがなんかちょっといいかもしれないけど。第1部は沖縄社会と……社会って言わないほうがいいのかな。

日高：共同体とか。

島村：共同……そう、共同……人々の共同体っぽい話なんですよ。神話なんかもそう。あーでも、神話から先はもう伝承論なんですよ。

日高：うんうんうん。

島村：だから、なんだろう、共同……うーん、えっとね、共同……組織とかね……伝承論……あー、っていうか、これはですね、明日の高知行きの飛行機の中でひらめくかもしれない。

日高：はい(笑い)

島村：播磨屋橋の上でいきなりこう神が降りてくるかもしれない。

日高：(笑い)

島村：ここまで分類ができてればあとは名づけの問題ですから。……橋の上できっと思いつきますよ。

日高：(笑い)

島村：ね。わかんないけど。っていうかその間に日高先生が思いついてると。

日高：いやいやいやいや(笑い)。そうするとこの対談の締めで部立てとタイトルが決定しましたっていうのではなく、報告書の目次を見てもらって、どんなことになっているのか、乞うご期待って感じですよ。(笑い)

島村：なかなか出てこないから、なぜか高知で、あれするよみたいな。(笑い)

日高：あとは語り残したことはないでしょうか。

島村：かなり、6時間……。6時に始めて今12時ですよ。

日高：録音時間は5時間弱くらいですね。最初にウォーミングアップで1時間くらい雑談してたから。

島村：このまま私はたぶん寝たらあれかもしれない、危ないから、うちで準備、何も準備してないし。

日高：あー、それは、すみま……。

島村：えー、とんでもございません私が悪いんです、いやいや誰も悪くなくて悪くないじゃないですか(笑い)。

で、これで6時5分のリムジンバスに乗りましてですね、あのー、なんでしたっけ、なんだっけ、どこ行くだっけ。

日高：(笑い)高知。

島村：(笑い)高知、高知。羽田空港に行つてまず高知に向かう。明日はたぶんぼーっとしてるでしょうね。播磨屋橋の上で御託宣が絶対降りるはず。播磨屋橋でね。

日高：はいはいはい。

島村：ありがとうございます。

日高：はい、おつかれさまでした。

収録日：2008年2月18日
場所：教育文化学部3-135
文字化：伊藤美樹子・高橋貴子・持田祐美子
編集：島村恭則・日高水穂